

Bulletin of Yokohama
Museum of Art No.17

ISSN 1881-6770

横浜美術館

研究紀要

第 17 号

Bulletin of Yokohama Museum of Art No.17

横浜美術館 研究紀要 第17号

Bulletin of Yokohama Museum of Art No.17 2016

目次

独立独歩のあゆみ

—画家・平野杏子インタビュー記録 [前編-1930~1980]

齋藤 里紗 | 5

The Path toward Independence and Self-Reliance:

Documentary Interviews with the Artist HIRANO Kyoko [Part 1: 1930-1980]

SAITO Risa | 17

【資料紹介】 下村観山画房日記『やまの上』（承前）

柏木 智雄 | 43

Introducing Documents: *Yama no ue* (On a Hill), Studio Diary of SHIMOMURA Kanzan

KASHIWAGI Tomoh | 19

独立独歩のあゆみ

—画家・平野杏子インタビュー記録[前編－1930～1980]

齋藤 里紗 (横浜市民ギャラリー)

はじめに

平野杏子氏(1930年生まれ)は、横浜美術館・横浜市民ギャラリーに所蔵作品のある画家である。1960～70年代の仏教をテーマとした作品でよく知られているが、80年代には《春林天》(横浜市民ギャラリー)に代表される架空の風景を描いたシリーズ、90年代前半の太陽や花等をモチーフにした作品を経て、同後半から現在にかけては縄文土器や古事記等をテーマに描いており、画題は多岐に渡る。また画風も併せて変容してきた。筆者はその主題・画風の変遷の背景に通底するものを探ることを目的に、2012年5月から11月にかけて同氏に計10回(5月28日、6月15日、7月6日、8月17日、8月30日、9月6日、9月13日、10月9日、11月2日)のインタビューを実施した。インタビュー実施場所はいずれも平野氏の自宅アトリエである。本稿は、このインタビューを基に2013年～2016年におこなった補足取材の結果を、作家の経歴・画歴に沿って時系列にまとめ直したもので、平野氏の校閲を得て掲載する。平野氏については生い立ちや作品の制作背景について自ら、また他者が記述したものがこれまでも複数出版されているが^[1]、今回は従来語られてこなかった部分を聞き出すことを心掛け、末尾に考察を付した。

平野杏子(ひらの・きょうこ)

1930年神奈川県伊勢原市出身。本名は京子^[2]。大久保作次郎、長屋勇、三岸節子に師事。油彩のほか版画、彫刻も手掛ける。旺玄会、新世紀美術協会への出品を経て無所属。国内の女性画家で結成された潮展に創立時(1969年)から参加。サロン・ド・メ展への招待出品(1980年他)、ヘンリー・ムーア大賞展での美ヶ原高原美術館賞受賞(1987年)等国内外で活躍している。韓国南山での仏蹟調査の実績は韓国でも高い評価を受けている。(fig.1)



fig.1
平野杏子氏近影(2015年9月)

凡例:

- ・筆者による補足は()、平野氏による補足は〔 〕で示した。
- ・話中の個人名や固有名詞は可能な限り正式な呼称を調査して表記したが、調査が及ばなかったものについてはそのまま(ママ)とした。地名については現代の呼称を()内に記した。なお敬称は略とし、生没年は本文中に付した。
- ・インタビューの内容はあくまで平野氏の話そのまま掲載している。

[1] 『磨崖仏賛』(1978年、耕土社)、『平野杏子作品集』(2003年、平野杏子作品集刊行実行委員会)、『平野杏子展』図録(2007年、平塚市美術館)等。

[2] 1970年より雅号を杏子と改めた。

一 幼少期のことや、出生地の伊勢原について教えてください。

旧姓は井田です。伊勢原はかつて門前町で古くから多くの人が行き交った土地柄のため、よその人間や新しい文化に寛大な雰囲気が残っていました^[3]。私が幼い頃は、日中はめいめい自分の仕事をしながらも夜になると将棋を指したり絵を描いたり、趣味の時間を大事にする大人が多かったと記憶しています。父（1901-1987）も多分にもれず趣味人で、夜は8人が座れるほど大きな炬燵に入って、鯛や海老の絵を墨で描いていた思い出があります。私もその傍らで家族のクロッキーをしていました。

父は伊勢原の酒屋の次男で、母（1908-1950）の実家は平塚市徳延の農家でした。父は自転車店を営んでおり、平塚や厚木にも出店していました。当時たいへん珍しかったハーレー社のオートバイに乗るようなハイカラな人で、私も幼い頃サイドカーに乗せてもらい横浜にもよく行っていました。父は二度召集され、いずれも伊勢原大神宮^[4]から出征していきました。帰還後は戦争で負った傷の後遺症で一時眼が見えず、私が代わりに販売用の自転車のデザイン画を描いたこともあります。

兄弟は自分も含め男女4名ずつの8人で、私は次女です〔そのうち男女2名は夭折〕。父は男女に関わらず子どもにできる限り多様な機会を与えたいという先進的な考えを持っていました。私は上海租界^[5]で建築技師をしていた叔父〔父の妹の夫〕から上海土産に貰った油絵具で、幼い頃から油彩を描いていました。また近所に住んでいた将棋棋士・十四世名人の木村義雄（1905～1986）の下に通い大人と一緒に将棋を指したことで、早くから大人の世界に触れることができました〔木村は後年、患者として私の嫁先の平野歯科医院に通ってくれました〕。当時としては恵まれた子ども時代を送ったと思います。（fig.2）



fig.2
伊勢原市の生家

一 少女時代について教えてください。

13歳から18歳まで県立厚木高等女学校（現・厚木東高等学校）に通いました。在学中二十日間だけ学徒動員のため相模海軍工廠で防毒マスクづくり作業も経験しました。当時は戦時下で徹底された愛国教育でしたので、小説を読むだけで不良とみなされるような風潮がありました。しかし学生の間では読書が流行っていて、こっそりとパール・S・バック『大地』（1931年）や西田幾多郎の哲学書等をみんなで回し読みしていました。学校の先生に何度か遠方から本を購入してくることを依頼され、その帰りの電車の中で買った本を夢中になって読んだ思い出もあります。15歳で迎えた終戦後は、一転してアメリカ流の民主主義教育になりました。GHQの教育部門が横浜にあり、月に一度学校単位でそちらに赴きアメリカ人から直接民

[3] 伊勢原市一帯は古くから相模国として栄えた。市内に位置する大山は山岳信仰の対象で山中には阿夫利神社（伝3世紀創建）の本社・下社およびその神宮寺として8世紀に創建された大山寺があり、信仰登山が18世紀からおこなわれてきた。また、三宮比々多神社（7世紀創建）や日向薬師（伝8世紀創建）、太田道灌（1432-1486）の墓所がある洞昌院（15世紀創建）等、各時代につくられた寺社が市内に多数ある。

[4] 元和年間（1615-1624）創建。伊勢原の地名の由来となった。

[5] 1842年の南京条約により開港した上海に設定された外国人居留地。当初米・英・仏が各租界を設定、後に英米列強と日本の租界をまとめた共同租界とフランス租界に再編。太平洋戦争終結時に消滅。

主義を叩き込まれたことが強烈な印象として残っています^[6]。

女学校時代の恩師は詩人で童謡作家の中村雨紅（1897-1972）^[7]でした。生徒のことをよく思いやってくれる先生で、同校卒業後も用事を頼まれたりお宅を訪問する等交流が続きました。中村先生の助言に加え花嫁修業になるとの父の強い希望もあり、美術学校ではなく共立女子専門学校^[8]被服科に進学しました。

―画業を志した具体的な契機はあったのでしょうか。

女学校時代、近所に朝日新聞記者の小平鐵男（ママ）が住んでいて〔夫人はドレスメーカー学院の講師でデザイナーでした〕、その自宅に長谷川利行（1891-1940）の静物画、村山槐多（1896-1919）の3号の裸婦、寺田政明（1912-1989）の8号のアマリリスの絵が飾られていました。幼少時から絵を描くことは好きでしたが、これらの作品に対峙し初めて油彩の奥深さを実感し、ある種のショックを受けました。3人の画家についても小平から教わり、油彩を描くことを目標とするようになりました。1945年の終戦後数年、小平宅は小田急線沿線に暮らす、私も含め10名ほどの若者が集まる寺子屋のような場となり、小平による文化や社会のちょっとした講義を傾聴しました。共立入学後は、上京時に東京の朝日新聞社の食堂で小平から福沢一郎（1898-1992）や寺田政明ら、活躍中の画家たちを紹介されたこともあります。小平は、自分が本格的な絵画に目覚めたきっかけを与えてくれた人です。

―共立女子専門学校時代（1948-1951年）はどう過ごされましたか。

洋裁・和裁・手芸・染色、その他多くの教養科目がありました。美術の授業にも力が入っていて週に3回授業がありました。加えて美術クラブにも所属し制作に打ち込んでいました。美術は洋画家の大久保作次郎（1880-1973）、長屋勇（1893-1961）^[9]に師事し、西洋美術史は嘉門安雄（1913-2007）、日本美術史は北川桃雄（1899-1969）^[10]の授業を受けました。共立講堂^[11]で催されていた映画上映会や講演会にもよく参加し、亡くなる直前の太宰治（1909-1948）の講演もそこで聞きました。共立時代は画家として自分の核が形成された時期でした。その理由は学校内に留まらず、通学時の小田急線の乗車時間が長かっ

[6] 連合国軍最高司令官総司令部（GHQ）下の組織、民間情報教育局（CIE）が民間教育のために設置したCIE図書館のことか。全国23カ所に設けられた。1952年の撤廃まで図書閲覧サービスに加え映画上映会やレクチャー等多くの民主化啓蒙の活動がおこなわれた。

[7] 本名・高井宮吉。代表作に童謡「夕焼小焼」。1926～1949年厚木実科高等女学校教員。

[8] 1886年共立女子職業学校として設立。「共立」の名の由来は、宮川保全、鳩山春子（第52～54代総理大臣鳩山一郎の母）、永井久一郎（作家・永井荷風の父）等34名が設立に関わったため。1928年共立女子専門学校、1949年共立女子大学設立。

[9] 山口県出身。1922年東京美術学校西洋画科本科卒業、引き続き同研究科に籍を置く。1924年商工省海外実業練習生に命ぜられ渡仏、1927年に帰国。1925年『老人の肖像』で帝展初入選、以来1934年まで9回帝展に入選、1936年新文展無鑑査に推薦。1952年第8回日展で『画室にて』が岡田賞を受賞。旺社社同人、旺学会委員を経て1955年大久保作次郎らと新世紀美術協会を設立。1941年から多摩美術学校講師を経て以後多摩美術大学教授、1942年より共立女子美術学園・共立女子大学教授。

[10] 東京出身。京都帝国大学経済学部卒業後京都で一旦教職に就いたが、志賀直哉の勧めで東京帝国大学美学美術史学科を卒業。在学中の1940年、鈴木大拙の英語の著作『禅と日本文化』を邦訳。帝国大卒業後に共立女子専門学校教授。1954年『室生寺』で毎日出版文化賞受賞。他の代表作に『法隆寺』（1942年、アトリエ社）、『日本美の探究』（1954年、法政大学出版局）等。

[11] 1938年落成。構造設計は内藤多伸、意匠設計は前田健二郎。学事以外にも貸し出され、音楽会等が催された。1956年2月に火事により焼失。即時復旧作業がおこなわれ、翌1957年3月に現在の講堂が落成。

たこともあって、車内で様々な人—『月刊美術』創始者の中野稔（ママ）や秦野在住の画家・宮永岳彦（1919-1987）等と知り合うことができました。

—専門学校卒業後のことについて教えてください。

1951年から2年間、比々多村^[12]の比々多中学校で教鞭を執り、「美術は教室で教えない」を信条として生徒を校外の丘に連れて行って写生する等、自由な授業をおこないました。私自身が10代後半の多感な時期に転換した民主主義教育を受け、自分の自由意思を尊重することを叩き込まれた影響があったかもしれませんが、しかし、次第にやはり画家になりたい気持ちが勝っていったこと、またその夢を叶えるために1951年から始めていた共立時代の恩師・長屋勇が主宰していた新宿絵画研究所での助手の仕事に専念する理由から、教職を退きました。

学校卒業後も人との出会いには恵まれました。私の記事をよく書いてくれたJapan Times記者で鎌倉在住のジェニファー・バード（ママ）とは、1952年に神奈川県立近代美術館で開催されたイサム・ノグチ（1904-1988）の展覧会で知り合いました[この展覧会には平野家と親交があった美術評論家・植村鷹千代（1911-1998）が関わっていました]。1954年に結婚し平塚に越してからも上京時に電車内で知り合った読売新聞記者の方のはからいで東京の読売新聞社の社員食堂が利用でき、そこでも更に人脈が広がりました。その他にも、大佛次郎（1897-1973）や、堀口大学（1892-1981）、高見順（1907-1965）等、鎌倉在住の文化人らとも、たびたび会食する機会がありました。どんなことを話したか詳細にはもう覚えていませんが、若い時期に様々な分野で活躍する著名な方々に出会い、交流できたことは誠に幸運でした。

—長屋勇氏からはどのようなことを学びましたか。

私の画家としての技術的な素地は長屋によるものが大きいです。長屋は岡田三郎助（1869-1939）に学び、写実を重視した人物画を多く発表しました。私の初期作品も具象的なもので、長屋に学んだことを素直に表しています（fig.3, 4）。こういった作品に対して、美術評論家・今泉篤男（1902-1984）から「長屋の真似ごとだ」との批判を受けたこともあります。

長屋は山口出身で、旧長州藩に関係のある家柄だったと記憶しています。無口な人でした。新宿区角筈3丁目（現・西新宿）のガスタンク裏にあった消防署の隣にアトリエを、新宿駅西口に新宿絵画研究所を構えていました。私は共立入学直後から週4～5回程研究所に通っていました。研究所には校舎が近かったため



fig.3
《さんま》
1952年／油彩、キャンバス、60.6×72.8cm、
平塚市美術館蔵

[12] 1889年から1954年まで存在。現在は伊勢原市の一部。

文化学院の生徒が多くいました。東京芸術大学を目指す学生もおり、助手になって以降私はデッサンを主に担当しながら、自分の制作にも励みました。

1949年に北川桃雄を中心につくられた「椿会」という集まりがありました。宮本三郎(1905-1974)や大久保作次郎ら共立の教員をはじめ、詩人で文芸評論家の野田宇太郎(1909-1984)や写真家の入江泰吉(1905-1992)等、様々な分野の文化人が集っていました^[13]。長屋邸も椿会の会場になることがあり、私もその隅に加わったことがあります。美術や文芸等の語らい、陶器の品



fig.4
《窓辺》
1952年／油彩、キャンバス、97.0×130.3cm

評等、戦後間もない時期とは思えない優雅な雰囲気がありました。

長屋は夫人ともども私をわが子のように扱ってくれました。彼は、私が自分の作風に近い具象絵画を描き続けることを望んでいたのかもしれませんが。私の結婚話が出ると大反対され、実際に結婚した頃から次第に疎遠となり後に決別してしまいました。

一 抽象への転向について詳しくお聞かせください。

私は長男が4歳、次男が2歳になった1959年に胃潰瘍になり、続いてノイローゼを併発、その後5年間精神的にも苦しみました。その病床で抽象の夢を見たことから、具象から抽象へと作風が一変しました。抽象は研究所助手時代から興味を持っていましたが、具象を得意とする長屋のもとでは許されない雰囲気があり、取り組むことができませんでした。長屋と離れ作画への制限がなくなったことで、抽象への欲求が一気に高まったのでしょう。抽象を描きたいという強い思いと、病気を通じ生と死とを深く思考したことが制作に直結した訳ですが、そこには西欧にはないシュルレアリスムを表したいという気持ちもありました。抽象に転じた初期には様々な可能性を模索し、絵画の領域を飛び出し石膏ボードに歯形を埋め込んだり、地べたにキャンバスを引いて足で描いてみたり、色々なことを試まし



fig.5
1963年に消失した作品の前に立つ
作家(1962年撮影)

[13] 「(前略) 戦後は北川家は頗る賑やかになりました。いつ行っても誰かお客がありました。敗戦で失業した私は前にもまして北川家訪問がしげくなりました。戦時中から閑談の会をやろうと、漸く売りはじめられた菓子を探求めておたずねしたりすると、きまって飛び入りのお客があり、それならばいっそのこと、北川さんを中心に共通の友人が集まって会をした方がいいということになりました。闇市で鯛を買って来たり、何やかや寄せ集めて暗い電燈の下で楽しい会を何回か催しました。その内に北川家の座敷ではせまくなり、共立の同僚の鱧利彦画伯のアトリエを拝借したのが昭和二十八年四月八日で、折から庭前の見事な白椿の花にちなんで椿会と名付けたのが今なお続いているわけです。」(森村学学園教諭・井上昇三「北川さんのこと」p76『追想 北川桃雄』1969年、三彩社)

た (fig.5)。絵画では卵型の形態や目玉型のモチーフ、不定形の線描等、後年の作品にも見られる要素が既に現れているのが自分でも面白く思います (fig.6, 7)。幼い頃は父が多種多様の鳥を飼っており、その後も自分で鶏を飼育してきたので、卵は常に身近にある存在です。素敵な形だと思います。

具象時代はデッサンを重視していましたが、抽象に転向した時点でそれまでのデッサンを全て破棄しました。自分の内側から沸きあがってくるものをひたすら描くようになったのです。やりたいことを力まかせに描いていた、ともいえるでしょう。

表現については、三岸節子 (1905-1999) [14] に紹介してもらった画家・星崎孝之助 (1905-1994) [15] に1965年の1年間ですが集中的に学びました。星崎の教えは詩人のマラルメ (1842-1898) の著作の解釈等も応用し [星崎がマラルメの著作を書き写したノートを使った独自のもの]、自分の内面より“幻想”をどう導き出すかというところに終始しており、その思想の理

解と実践はたいへん困難でした。技術的にも絵具の混色を禁じられ、最も細い日本画用の面相筆で描くよう指導されたため制作には膨大な時間がかかり、15号の作品を1年かけて完成させるほどでした。この作品が《思念の刻印》(fig.8) です [制作は1965-1966年、発表は1967年]。星崎の指導はあまりにも厳しく、教えに従って賢明に描いていたら吐血してしまい、それを機に同氏のもとを離れました。

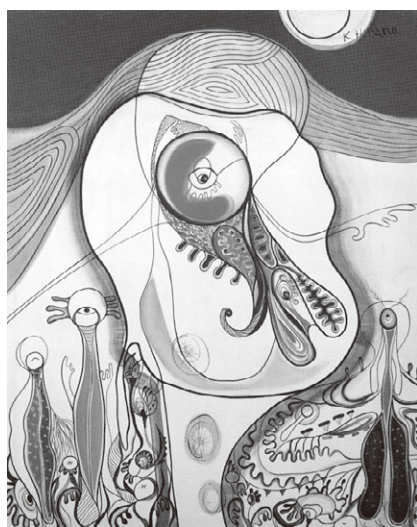


fig.6
 <輪廻の章Ⅲ>
 1961年/油彩、キャンバス、
 162.5×131.0cm



fig.7
 <触手のある暦>
 1965年/油彩、キャンバス、80.5×100.0cm、
 平塚市美術館蔵



fig.8
 <思念の刻印>
 1967年/油彩、キャンバス、
 65.2×50.0cm

[14] 愛知県起町 (現・一宮市) 出身。岡田三郎助に師事。1924年に三岸好太郎 (1903-1934) と結婚。1947年女流画家協会設立の発起人の一人 (他に桂ユキ子 [ゆき]、雑賀文子、佐伯米子ら11名) だがすぐに離脱し後に渡欧 (1954-1955年)、以降無所属で活躍。1968-1989年南仏を拠点に制作。1999年大磯で没。1994年文化功労者。

[15] 小田原出身。関東大震災後に渡仏、戦後もパリに留まり日本と行き来しながらサロン・ド・メ等で活躍。

—1961年の三岸節子氏との出会いと、その影響について教えてください。

三岸節子とは抽象に転じて2年目に大磯で知り合いました。三岸の大磯のアトリエは私の従兄弟のみかん山の裏手にあり、偶然彼女を見かけ声をかけたのが最初です。すぐに意気投合し以後長きに渡って親交を持ちました。

三岸を通じて、また多くの人と知り合うことができました。先述の星崎の他にも三岸と一緒に女流画家協会を立ち上げた桂ユキ子（1913-1991、後のゆき）等画家をはじめとして、瀬戸内晴美（1922年生まれ、後の寂聴）、司馬遼太郎（1923-1996）ら文学者や批評家の方々もいました。直接会話を交わしたわけではありませんが、彼らの会話を近くで聞いたことで価値観を広げることができました。1968年の個展を企画してもらった縁で現在まで付き合いのある、画商で現在は陶芸家の原着愁（1934年生まれ）とも三岸が縁で知り合いました。

三岸とはお互いの作品について語るよりも、画家としての生き様や女性の社会進出について議論することが大半でした。そのため親しくなって以降は彼女のアトリエを見たこともありません。三岸とのつきあいや対話が画家として生きることを真剣に考えるきっかけとなり、私の画家としての精神的な基盤を形成したのだと思います。

—1962年の初めての海外研修について教えてください。

夫の出張に伴い、2週間ハワイに滞在しました。私にとって当時は同地にまだ芸術らしい芸術がないように残念に思いましたが、日系3世の現地コーディネーター・高西夫妻と知り会えたことが何よりの収穫でした^[16]。私よりも20歳ほど年上の高西夫妻は、いずれも戦前に広島に留学した経験がありました。留学時二人は日本人々との交流や日本の地の見聞から、自分たちは時間的・物理的にも心情的にも日本とは遠くかけ離れてしまい、故郷がもはや日本にはないことを痛感したと話してくれました。夫妻には、自分たちの祖父母が日本のどこの出身であるかを知る術がもはやありませんでした。ルーツを失ってしまった日系人が持つ哀しい思いは、夫妻との出会いなくして知り得ませんでした。後年二人は何度か日本を訪ねてくれ、その度平野家に宿泊しました。私は夫妻に絵を教え、後に夫人はハワイ大学で本格的に美術を学び、ハワイでアトリエを構えるまでになりました。彼等とは長く付き合いましたが、二人ともすでに他界してしまいました。晩年には台風で財産を失ったり、夫婦揃って重病を患う等不幸が重なり、それらを記した手紙が来るたびに心が痛みました。夫妻からの手紙は今も大事にとってあります。

高西夫妻に限らず、私はこれまで人との出会いに恵まれてきました。人との交流から得るものは本当に大きいです。

[16] 1868年日本からハワイへの移民開始。1924年排日移民法成立まで約22万人が同地に渡った。

—1960年代以降、特に70年代を中心に仏教をテーマにした作品を描いた背景を教えてください。

遑ると仏教は幼い頃から身近にありました。昔の伊勢原では学校の教員と僧を兼ねている人がいましたし、私は仏像や絵画への興味から寺社を訪れていました。しかし本格的に仏教に関心を抱いたきっかけは、大学時代の北川桃雄との出会いです。授業で奈良の法隆寺等古寺を訪れ、仏教美術の薫陶を受けました。北川は終戦後に在家仏教運動に関わっており^[17]、私は無宗教ですがその理念にたいへん共感しました。北川の著作は今も手にとってページをめくると、制作のアイデアが浮かぶことがあります。仏教美術や日本美術については北川の著作をおさえれば十分だと思っています。私の作品の中で仏教をテーマにしたものの考え方の原点は、彼の著作の中にあります。1959年以降5年間闘病した際に心のよりどころを求め、読んだのも仏教の本でした^[18]。病床で得た抽象を描きたい欲求と仏教とが結びつき、その後の作品となりました。

1969年3月に美術評論家の竹田道太郎(1906-1997)とともにイタリア・フランスを巡るツアーに向かう途中飛行機が故障し、カルカッタ(コルカタ)に急遽着陸したため、偶然インドに3日間滞在することになりました。タージ・マハルを訪れたり、庶民の暮らしを見たりする等たいへん貴重な経験でした。この時は仏教に関する史跡や土地は訪れていませんが、ホテルで目にした密教画に惹きつけられました。また1969年6月に出会った韓国の新聞記者・金夫妻に招待され翌70年に初めて韓国を訪れました。その際導かれるように慶州・南山の磨崖仏を知り、その後9年間も磨崖仏の研究にのめり込みました^[19]。後年になると私の関心は宗教以前のシャーマニズム—自然と共生する先史時代が有する“美德”へと移っていきます。今思うと磨崖仏は山中の岩肌に仏像が彫られ、自然と人々の精神・信仰との融合が具現化したものだったことも、当時とりつかれた大きな理由だったのでしょう。1973年にはインドネシアの仏教遺跡ボロブドゥールを訪ね、翌年はインドを再訪しました。いずれも仏教の源流に近づきたい思いからでした。この時の取材をもと



fig.9
《ボロブドールの善財童子》
1974年／油彩、キャンバス、193.9×259.1cm



fig.10
《磨崖仏賛 I》
1978年／油彩、キャンバス、170.0×300.0cm、
平塚市美術館蔵

[17] 1952年7月在家仏教協会設立。北川は1960年評議員、1962年理事に就任している。

[18] 大方広仏華嚴経の經典であったとされる(土方明司「独創・幻視の画家 平野杏子の世界」p59『平野杏子展』図録[前出]ほか)。

[19] 金氏との出会いや磨崖仏の研究については『磨崖仏讃』(前出)に詳しく述べられている。

に、《ボロブドールの善財童子》^[20](1974年) (fig.9) 等を制作しました。並行して韓国での磨崖仏の調査は続けており、1978年の《磨崖仏》シリーズ (fig.10) が仏教をテーマとした作品の集大成となりました。

チベットには「宗教とともにある美」があると思いますが、当時はその魅力をなかなか理解することができずチベットには行きませんでした。もし当時同国を訪れていたら、深入りしすぎてしまったかもしれません。現代はグライ・ラマが来日するような時代で、私自身がチベットまで赴くことに大きな意味はないと感じています。

—北川氏の著作は現在も読まれるということですが、他に影響を受けた書籍はありますか？

近年家の中を整理していて、若い頃家の隣にあった書店で父が買ってくれたキンダーブックが出てきました。野田九甫(1879-1971)や岸田劉生(1891-1929)等名だたる画家が挿絵を手がけており、今見返してもたいへん立派です。当時は子ども向けでも安易なものは少なかったように思います。また江戸時代の和綴じの浮世絵の本も出てきました。こうした本格的な挿絵が描かれた書籍に幼少時より数多く触れることができたことは、誠に幸運でした。

女学校時代に読んだものの中では『画人 岡田三郎助』(大隈為三・辻永編、1942年、春鳥会)や『画家と巴里』(正宗得三郎著、1917年、日本美術学院)が印象に残っています。いずれも日本における洋画を確立した画家たちにまつわるものです。彼らの海外での見聞やそこから得た所感は同じ画家を目指すものとして興味深く読みましたが、一方で近代日本では国家が芸術を牽引しながらも、芸術界に深く介入していたことが読み取れ、憤りに似たものも覚えました。そのような芸術のあり方は間違っており、そういった束縛から独立したいと強く感じました。

—同世代の作家との交流について教えてください。

同世代で交流した画家は数多く、一人ひとり取り上げることは困難です。上の世代で特に著名な方をあげると、岡本太郎(1911-1996)は無所属で多様な取組みをしていたので、1960年代を中心に共感を持ってその活動に注目していました。銀座の画廊等で遭遇すると一緒にお茶を飲んだこともあります。藤田嗣治(1886-1968)の君代夫人とも画廊でよく語りました。かつては藤田の作品が収録された戦争画の画集『太平洋戦争名画集』(1967年、ノーベル書房)および『太平洋戦争名画集 続』(同1968年)も持っていました。

制作の上でライバルだと感じていた作家はいませんでした。女流画家としての生き様に関しては食い違ふと感じる作家は数人いました。当時は在野で制作を続けることは本当に難しく、私のようにまったくの無所属で奮闘している画家は少数派でした。何軒かの画廊の人と付き合いはありましたが、作品を預けたことはありません。画廊にも所属せず、完全に無所属で活動するのが私の信条です。

[20] タイトル表記「ボロブドール」は作家によるもの。

—海外で交流された作家・興味を持った作家はいましたか？

1960年代末、三越美術部の方から紹介され、三越のフランス出店に関わっていたフランス人タピストリー作家・画家のソーキー・マスカン（Sooky Maniquant 1934年生まれ）と知り合いました。ご主人はパリで画廊を営んでおり、夫妻は欧米のシュルレアリスムとは異なる私の絵画に興味を持ってくださいました。私は後年、マスカンを東北や京都、金沢や箱根等を各一週間くらいずつ案内しました。彼女は私を通じて日本の文化や民芸に詳しくなり、後に日本の民芸をヨーロッパに紹介するようになりました。ほかにはサロン・ド・メに出品していたことが縁で、画家で評論家のイヴォンス・タイヤンディエ（Yvon Taillandier 1926年生まれ）等と付き合いがありました。

また私は版画も手掛けていますが、芸術作品の永遠性を追求するにはエッチングが秀逸であるとの思いに至りました。中でも作品に感銘を受けた長谷川潔（1891–1980）の弟子になりたいとまで考え、1969年4月にフランスに赴いた際本人を訪ねました。弟子はとらないとして断られましたが、当時はそれほど彼の作品に強く惹かれていました。

—1952年から所属していた旺玄会を1954年に、1961年から所属していた新世紀美術協会を1970年に退いた理由を教えてください。

結婚を機に在野でやっていきたい気持ちが以前よりも強くなったため、旺玄会は退きました。抽象を描くようになり1961年から新世紀美術協会に出品しましたが、やはり一人で活動したい気持ちから後にそちらも退会しました。それ以来どこにも所属せず独立独歩でやってきました。

まとめ

前編は平野の幼少期から1970年代までを追った。平野が絵画に出会い、画家となる過程、また画家として活躍するようになって以降も著名人を含め多くの個人名が登場し、幼い頃から環境や出会いに恵まれたことがよくわかる。従来も平野が師事した画家として三岸節子がよく知られてきたが、長屋勇との子弟関係と離別が抽象への欲求をより掻き立てたこと、闘病以前の学生時代に授業を受けていた北川桃雄との出会いが後に仏教へと関心を抱ききっかけであったことが今回明らかとなった。

作品に目を向けると、星崎孝之助の指導を受けた1965年を挟んだ前年の《輪廻の章Ⅲ》（1961年、fig.6）《触手のある暦》（1965年、fig.7）と、後年の《冠を流したオフエリア》（1970年、fig.11）や《ボロブドールの善財童子》（1974年、fig.9）とでは印象がかなり異なる。前2作品では平野も指摘するように、後年も登場する卵や目等のモチーフが描かれるものの全体の構成はまだ簡素で余白もあり、色彩も原色が多い。対する後



fig.11
《冠を流したオフエリア》
1970年／油彩、キャンバス、
145.5×97.0cm、
横浜美術館蔵

2作では細密な描写・複雑な色彩で具象的なモチーフが描かれる。1年間ではあるが星崎の指導とそれを受けての試行錯誤が抽象へ転じて以降の平野の画風をもう一段階深化させたのだろう。また、1970年から毎年のように訪れている韓国をはじめとする海外取材の影響や、話中には出てこなかったが1969年から潮展^[21]という新たな発表の場を得たこと、かつ翌年の新世紀美術協会退会によって自身の表現の追求に集中する地盤が整ったために、70年代の充実した作品群が生まれたことも伺える。

若年期の愛読書の記載から、かつての美術界への国家の干渉を読み取り憤りを覚えたエピソードからは、まだ女性画家が活躍するのが簡単ではなかった時代から、旺玄会・新世紀美術協会に一度は所属しながらも“独立独歩”の精神で自分だけの表現を模索し続けてきた平野の気概あふれる姿勢の原点が垣間見える。

後編では、前編で触れられなかった版画や立体を含め80年代以降の制作や今後の展望までを取り上げたい。

謝辞：

本稿執筆にあたり、平野杏子氏にはインタビューに加え幾度も取材や校閲にご協力いただきました。また、平塚市美術館には作品図版のご提供をいただきました。記して感謝いたします。

[21] 平野氏以外の設立メンバーは三岸節子、片岡球子（1905-2008）、野田好子（1925-2016）、郷倉和子（1914年生まれ）、荘司福（1910-2002）、大久保婦久子（1919-2000）、雨宮敬子（1931年生まれ）、原田麻那（1922-2006）。

平野杏子略年譜

[凡例] 展覧会や出品作品名は本文中に出てくるものを中心に抜粋した。

西 暦	和 暦	
1930	昭和5	伊勢原市にて出生。本名京子。
1943	昭和18	神奈川県立厚木高等女学校入学。
1948	昭和23	3月、共立女子専門学校被服科に入学。
1950	昭和25	2月、母・トシ没（享年42）。
1951	昭和26	3月、共立女子専門学校被服科卒業。 新宿絵画研究所助手となる。 10月、比々多中学校教諭となる。
1952	昭和27	6月、第6回旺玄会展（東京都美術館）に《さんま》(fig.3) 他2点を出品、0氏賞を受賞し、会友推挙となる（以降1954年まで出品）。
1953	昭和28	第7回旺玄会展（東京都美術館）に出品、旺玄会会員となる。
1954	昭和29	4月、平野美治と結婚、平塚に越す。
1959	昭和34	心身の健康を崩し静養。
1961	昭和36	2月、第6回新世紀美術協会展（東京都美術館）に2点出品、準会員となる。 三岸節子と出会う。
1962	昭和37	2月、第7回新世紀美術展（東京都美術館）に2点出品、会員となる（以降1965年まで出品）。 ハワイで初の海外研修。
1963	昭和38	3月、第3回神奈川県女流美術家展に出品、県女流美術家協会賞、高島屋賞を受賞。 10月、出縄のアトリエ完成後台風に遭遇し、多くの作品を失う。
1965	昭和40	7月、平野杏子展（神田ときわ画廊）「触手のある暦」に出品。 9月、第9回シェル美術賞展（銀座いとう画廊）に《触手のある暦》(fig.7) を出品。 12月、第9回安井賞候補新人展（国立近代美術館）に《輪廻の章》を出品。 星崎孝之助に師事する。
1967	昭和42	5月、第21回新樹会展（日本橋三越）に《思念の刻印》(fig.8) を出品。
1969	昭和44	3月、第1回潮展（銀座三越）に出品（以降1983年まで出品）。 3月～4月、インドへ滞在後、ヨーロッパを取材。 6月、韓国の新聞記者・金氏と知り合う。
1970	昭和45	3月、第2回潮展（銀座三越）に《冠を流したオフエリア》(fig.11) 等を出品。 3月、初めて韓国を訪れる（以降1972年、1974年を除き1981年まで毎年取材）。 ヨーロッパ取材。 新世紀美術協会を退会。
1972	昭和47	ヨーロッパを取材旅行。
1973	昭和48	9月、インドネシアを取材。
1974	昭和49	2月、第6回潮展（銀座三越）に《ボロボドールの善財童子》(fig.9) 等を出品。 3～4月、インド・タイ・インドネシアを取材。
1976	昭和51	9月、平野杏子招待展（韓国、釜山塔美術館）に65点出品。
1978	昭和53	11月、個展「美の世界を新羅に求めて」（銀座ギャラリー・フィナル）に《磨崖仏賛I》(fig.10) 他を出品。 『磨崖仏賛』（耕土社）を出版。
1980	昭和54	3月、平野杏子招待絵画展（ソウル市世宗文化会館）に出品。 サロン・ド・メ（パリ）に《春林天》を招待出品。

The Path toward Independence and Self-Reliance: Documentary Interviews with the Artist HIRANO Kyoko [Part 1: 1930-1980]

SAITO Risa

Hirano Kyoko is an artist whose works are part of the collections at the Yokohama Museum of Art and Yokohama Civic Art Gallery. Though she is best known for Buddhist-themed works of the 1960s and '70s, Hirano has dealt with a diverse range of subject matter. These include series of fictional landscapes from the '80s, best exemplified by *Shun-rin-ten* (Yokohama Civic Art Gallery); works from the early '90s focusing on motifs such as the sun and flowers; and works that she has continued to make since the late '90s dealing with Jomon ware and the *Kojiki* and other ancient texts. Hirano's style has also undergone many changes. To better understand the background for the vicissitudes in Hirano's subject matter and style, the writer conducted a total of ten interviews with the artist in 2012 (May 28, June 15, July 6, August 17, August 30, September 6, September 13, October 9, October 24, and November 2). All of these were conducted at Hirano's house-cum-studio. This text has been compiled chronologically according to events in the artist's personal life and career by referencing supplementary materials from 2013 to 2106 based on the interviews. Though a number of articles have been published in the past in which Hirano and others explained her personal and artistic background, the writer took special care to ask about topics that Hirano had not previously addressed and added some final thoughts.

This, the first of a two-part series, traces Hirano's life from childhood to her work of the 1970s. Blessed with many opportunities and a family environment in which she was exposed to painting as a child, and fortunate to make many acquaintances, including some celebrated figures, Hirano said that these experiences often provided her with stimulation during her maturation as an artist. Anecdotes about reading and her enthusiastic participation in film and lecture event at the Kyoritsu Auditorium reflected Hirano's thirst for knowledge. She also spoke about various important figures who exerted an influence on her work. In addition to discussing her well-known relationship with Migishi Setsuko, Hirano talked about how her association and subsequent break from Nagaya Isamu, with whom she studied as a university student, prompted a change in direction from figurative to abstract painting. Hirano also explained how the class she took with Kitagawa Momoo led to her later interest in Buddhism, and how studying with Hoshizaki Konosuke, to whom she had been introduced by Migishi in 1965, inspired her to make increasing use of a detailed style of depiction.

In regard to her adoption of Buddhism as a central theme in the '70s, Hirano said that she was inspired by *Daihokobutsu Kegon-kyo* (Avatamsaka Sutra), which she came across in a book of Buddhist writings that she obtained while recuperating from an illness. And after supplementing this with research on Buddhist countries like India and Indonesia, she created a series of highly detailed works. In particular, after being attracted by the Buddhist images carved in stone on Mt. Namsan in Gyeongju during her first visit to Korea in 1970, Hirano continued to study the site for a period of nine years, culminating a large series called *Magaibutsu-san* in 1978. At the same time, she published a book called *Homage to Magaibutsu-san*, which contained meticulous information on the Buddhist carvings that Hirano had studied. In the interview, Hirano explained that one reason for her interest in the site was "the fusion of natural and human spirit and faith," a theme which she continued to pursue after Buddhism.

After experiencing a dramatic shift from a patriotic to a democratic curriculum, which occurred around the end of World War II when Hirano was 15, she became acutely aware of the importance of free will. Hirano recounted her youthful experiences with anecdotes about her love of reading while attending a girls' high school and the anger she felt when she read about how the Japanese government had interfered with the art world in the past. She also talked about having once joined groups like the Ogenkai and Shinseiki Bijutsu Kyokai, but at the same time delving into her own art with a spirit of “independence and self-reliance,” which provided a spiritual foundation for her later work.

Introducing Documents: *Yama no ue* (On a Hill), Studio Diary of SHIMOMURA Kanzan

KASHIWAGI Tomoh

Continuing on from the previous issue, in this edition I reprinted and published a bibliographical essay concerning the second half the *Nihonga* (Japanese-style) painter SHIMOMURA Kanzan's studio diary, *Yama no ue* (On a Hill), which runs from October 1, 1919 to February 29, 1920.

During this period, Kanzan met with his close ally YOKOYAMA Taikan, who was associated with Nihon Bijustu-in (the Japan Art Institute), in response to efforts to restructure the art world following the founding of Teikoku Bijutsu-in (the Imperial Academy of Fine Arts). At the same time, Kanzan allowed ten works he owned by the late HASHIMOTO Gaho to be included in a posthumous exhibition of the artist's paintings, and warmly received Gaho's wife. Kanzan also agreed to help found the Ernest Fenollosa Memorial Society in recognition of the noted scholar's achievements. These activities can be seen as attempts to honor his links to kindred spirits and former teachers.

In addition, Kanzan was in constant contact with members of his own support group called the Kanzan-kai (Kanzan Society) as they prepared to hold an exhibition commemorating the group's tenth anniversary. The diary also indicates Kanzan enjoyed a wide circle of acquaintances, receiving visits and corresponding with countless *Nihonga* painters such as YOKOYAMA Taikan and KIMURA Buzan, and other cultural figures such as art administrators such as MASAKI Naohiko and MIZOGUCHI Teijiro.

As he had been ordered to paint epic works, Kanzan did not participate in the revived Nihon Bijutsu-in exhibition this year. Though there were over 100 entries in the first half of the diary (introduced in the first article) dealing with Kanzan's artistic practice, the second half only contains about 50 on that subject. Several entries suggest that excessive drinking had begun to interfere with this artistic output.

【資料紹介】下村観山画房日記『やまの上』（承前）

柏木 智雄

解題

紀要前号では、『やまの上』の前半部分である大正八年一〇月一日から翌年二月二十九日までの記事を翻刻し紹介した。紀要本号では、これを承けて、その後半を翻刻し解題する。

観山と同志・先師

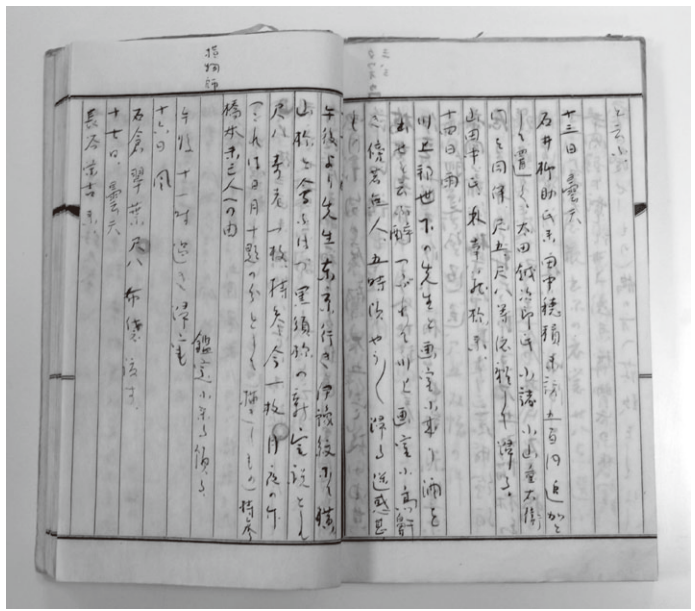
前号の解題に記した通り、大正八年九月六日、勅命により帝国美術院規定が發布され、同月八日、院長以下会員が任命された。文部大臣の中橋徳五郎は、これを機に、在野の美術団体の統合をはかるうとして、日本美術院から横山大観と下村観山を帝国美術院会員に招こうとしたが、大観、観山そろってこれを固辞し在野を貫いた。こうした美術界再編の動きに対応するためか、「午後より、先生、東京行き、伊豫紋にて横山様と会ふはづ」（三月一五日、挿図）、「大観氏より電話、近日、来浜との事」（六月一六日）、「横山大観氏、名取氏、来訪。名取氏、午前中、帰る。大観氏同伴にて、先生、千登世へ御出掛になる」（六月二八日）といった記事が散見され、盟友横山大観としばしば会合している事実を確認できる（「伊豫紋」は東京上野の、「千登世」は横浜関内の老

舗料亭）。

「雅邦遺墨展覧会出品の幅十点、龍岡町、橋本へ届く」（三月二八日）、「午前九時、雅邦遺墨展覧会へ御出掛け」（四月一日）といった先師橋本雅邦に関する記事がいくつか認められる。この年の春に東京美術学校で開催された雅邦遺墨展覧会に家蔵の雅邦作品を出品し、展覧会初日に出向いているだけではなく、「今一枚」（〇）月夜の竹（これは日月十題の分として描きしもの）、持参。橋本未亡人への由」（三月一五日、挿図）、「雅邦先生未亡人、御子息御同伴にて御出になる。鎌倉へ参らる途中の由。午後、自動車にて、横浜駅まで先生と送る」（六月三日）とあるように橋本雅邦夫人に自作を贈呈するなど手厚く遇しており、亡き先師への追慕の念は篤かった。六月一〇日には「故フェノロサ氏記念会発起人の賛成承諾の件にて封書、来る。承諾の旨、返事、出す」という記述があり、観山の画才をいち早く見出したアーネスト・フェノロサの業績を顕彰する会の発会に賛同している。翌大正一〇年に、フェノロサ氏記念会は、フェノロサの著書『東亜美術史綱』を有賀長雄の翻訳で出版することになる。

観山会について

五月一日の記事に「十四日、午後五時、芝、紅葉館にて観山会十週記念を祝すべく、冥^{マヤ}を開く由」とある。明治四四年に日本橋倶楽部で発会した「観



挿図

「山会」が十周年を迎え、大正九年五月三日から二五日まで、同じく日本橋倶楽部を会場にして観山会展覽会が開催された。一四日の紅葉館（芝公園内にあった高級料亭）における宴席も含め、観山は初日から、連日、会に足を運んでいる。観山会は、観山芸術を愛好する当時の政財界の著名人の集まりで、洪沢栄一や法学者の高田早苗などが創立会員に名を連ねる。年に一、二回会合を催し、観山作品を購入して清談し、以って観山の創作活動を支援することが目的であった。観山にとつては、まさに後援組織に相当し、会は観山の没年まで継続されている。

観山と文化人の交流

井上辰九郎や中山隣之助ら観山会関係者との交際の他に、日記からは、多くの文化人との交際もうかがえる。主な氏名を列記（五十音順）すると、荒井寛方（日本画家）、石川丹麗（日本画家）、石倉翠葉（俳人）、乾南陽（日本画家）、海老名文雄（洋画家）、片多徳郎（洋画家）、川上邦世（彫刻家）、木村武山（日本画家）、児玉素行（日本画家）、齋藤隆三（史学者）、佐伯定胤（法隆寺管主）、島田友春（日本画家）、長野草風（日本画家）、中村岳陵（日本画家）、橋本永邦（日本画家）、橋本秀邦（日本画家）、原三溪（実業家）、藤田青花（仏教美術研究者）、前田青邨（日本画家）、正木直彦（美術行政家）、松岡文橋（化学者）、溝口禎次郎（美術史家・美術行政家）、横山大観（日本画家）などの名前が挙げられる。

観山の制作

文中に「○」の印影の朱文印が捺されている箇所には、観山の制作に関する記述が認められるが、それらを中心に、大正九年三月から同年六月までの期間で制作に関わる記事を抜粋すると、四九件を確認できる（別表1）。この年は、王世子殿下婚礼の御祝献納画や、大正七年に下命された明治神宮御内殿の六曲屏風一雙「四季花卉図」の揮毫擱筆のため、再興第七回院展への出品はない。江戸風俗展覧会に出品した衣装二八点（日記巻末の目録）や「光起筆、小倉山表装、出来」（三月九日）にある土佐光起のやまと絵、「午前九時過ぎより、幅（古画、宋画、老子出関の大幅、米庵小像等）六七点東京へ

「持参」(四月三日)にある宋元画や市河米庵像の小品などの家藏品は、観山の風俗や古画の研究の一端を具体的に示している。また、「粉河寺縁起、一卷、頼む。但し、並製一卷、三十五円也」(三月二十九日)の記事は、大正七年に出版された粉河寺縁起絵(国宝、粉河寺蔵、京都国立博物館寄託)のコロタイプ版を入手したことをうかがい知ることができ、平安時代後期の絵巻物の研究に取り組みうとしていることが分かる。

こうした研究に基づいて、大作や小品の応需制作に取り組み一方で、「此の四五日来、筆を執らざりしも、今日初めて、尺八、舟子の図、御描きになる」(五月十八日)、「午後十二時頃、御帰り。大分酩酊の様子」(五月二十五日)、「酔十日、殆んど筆執らず、今日に及ぶ」(六月二日)といった記事は、この頃、過度の飲酒が制作の妨げとなりつつあったことを示唆している。事実、本日記の前半では制作に関わる記事を一〇九件抜粋できた(別表2)が、後半ではおよそ半数となっている。

凡例

- ① 本稿は、下村観山が横浜の本牧和田山に構えた居室兼画房の、大正八年(一九一九)十月一日から同九年(一九二〇)六月三十日まで〔前号において「同九年(一九二〇)十月三十日まで」と記したのは誤りであるので、以って訂正する〕の家内の出来事を記した日録『やまの上』の内、前号を承けて同九年三月一日から六月三十日までの記事を翻刻したものである。
- ② 一、翻刻にあたっては、原本にあたり、読解の便を考慮して、原本の体裁を尊重しつつ以下のように改めた。
- ③ ① 紙幅の都合により本書の形状による改行等については原則として追込みとした。
- ② 固有名詞や明らかな意図をもって使用されている旧字体以外は、原則として新字体に改めた。算用数字は「拾」「廿」「卅」を除き、「壹」を「一」「弍」を「二」として新字体とした。また、異体字をそのまま用いた場合がある。
- ③ 変体仮名は平仮名に改めた。
- ④ 原本の抹消部分は、該当箇所左側に「」で示し、抹消箇所訂正がある場合は、左側に「」で示すとともに、右側に訂正の字句を記した。
- ⑤ 加筆・挿入文字、記号は「」で括った。
- ⑥ 再読文字は漢字を「々」、片仮名を「ヽヽヽ」、平仮名を「ヽヽヽ」、二字続きは「〳〳」とした。
- ⑦ 本文中に誤字、脱字、意味不明な文字がある場合、「ママ」「カ」など行間へ注釈を付記した。

⑧ 汚損等で判読できない箇所、闕字となっている箇所は、字数が判明する場合は□□□□で示し、字数が判明しない場合は□□□□などをもって示した。

⑨ 編者が加えた注は「」で示した。

⑩ 適宜、読点や句点、並列点を付した。

一、収載した史料の概要は以下の通りである。

『やまの上』：紙本墨書・袋綴じ冊子装（①中村屋製）の印刷文字あり、

丁数一八九、縦二四・七cm 横一六・二cm 厚一・三cm

翻刻

三月〔欄外〕

三月一日 曇 雨模様

伊藤正之助、鑑定物、発送。石倉翠葉氏よりブドウ酒二本着。大森、東京美術日報社より、書留の封書、来る。百六十円を振替で送るから、尺五、一枚、描いてほしい云つてゐる。

二日〔欄外〕分

観山会、井上辰九郎氏、尺八、「○」「勇駒」、中山隣之助氏の招。

三日 曇天

絵絹十二三枚、張る。三越、清水氏、来。屏風の催足マヅなり。

四日

島田友春氏、来。尺八、「○」「東坡先生」……竹林高士の如き図、渡す。東京美術日報社より百六十円の書留、来る。早速、返送す。東京本所大平町二ノ一五、新井半之助、春草筆、色紙「松上の鶴」、鑑定にと送り来る。偽筆なり。早速、返送す。高嶋屋美術部、殿塚、小品物、催足マヅに来る。神田の木村博士宅へ電話を通す。

五日 概ね晴

大阪、堀氏夫人、来訪。午後、東京、坪井氏、雛の幅、催足マヅに来る。菓子包と粗品として、五百円包み来る。此前の三百円と合して八百円なり。日本橋、小

熊慶造より書留の封書にて、一昨年（大正六年）の箱書の催足。^{ママ}
長野県諏訪郡平野木

笠原 清

より書面小包（偽筆）来るも、箱書やら鑑定やらもわからず。

六日

別になし。三越、清水氏、来。

七日

小林源太郎氏、来。川島鉄之助、松垣同伴、来訪。

八日 晴

寺内銀二郎、井上徳三、丹青の記者、来。江戸風俗展出品の衣裳廿八点、選ぶ。

九日 晴

黒須氏、来訪。光起筆、小倉山表装、出来。塩川よりも二三点、出来。

十日 概ね晴^{ママ}

本多晋氏、来訪。寺内へ電話を通ず。尺五双幅の件。

十一日 曇り

水谷慎太郎、扇面、盆踊、鑑定。色紙なほし。箱書、題、朝。会津、菟田方
倶楽部、岩田氏、来。四月下旬の展観に、尺五、一枚の由。其「タツオカ 三、
三」節、印譜もとの事。橋本秀邦氏より、全快祝、着。伊豆、藤原伊三郎、

箱書。長野県、笠原清、鑑定物、返送。帝国美術株式会社より、二尺巾絵絹、
届く。寺内新太郎、来。尺「〇」五双幅、林和靖、渡す。夜、野毛、倉林氏、
石原様、同道来訪。夜に入り、雨降る。

十二日 曇天

寺内より電話にて、石井柳助氏の林和靖（昨日渡せしもの）、鶴の方へ落款
をしてほしいと云ふ。

十三日 曇天

石井柳助氏、来。田中穂積、来訪。五百円、追加として置く。太田鐵次郎氏、小
諸、小山重右衛門を同伴。尺五、尺八等依頼して帰る。山田中氏、林幸蔵様、来。

十四日 雨

川上邦世、下の先生と画室に來り酒を出せと云ふ。酔つぶれて、川上、画室
に高軒き。傍若無人。五時頃やうく帰る、迷惑甚し。

十五日 雨

午後より、先生、東京行き、伊豫紋にて横山様と会ふはづ。黒須様の新宅祝
として、「〇」尺八、寿老、一枚、持参。今一枚「〇」月夜の竹（これは日
月十題の分として描きしもの）、持参。橋本未亡人への由。

^{（欄外）}
指物師

鑑定に来る。預る。午後十一時過ぎ、帰宅。

十六日 風

石倉翠葉、〔○〕尺八、布袋、渡す。

十七日、曇天

長谷栄吉、来。

十八日 晴 好天気

橋本永邦氏来訪。栗林茂氏、元白木屋呉服店美術部の人、来。清水石仙より朱板の□□、着。

三重県阿藝郡上野村、秋田弥吉郎、箱書、扇面なほし、楓、発送。栗林氏、来意は、五月展観につき依頼したき由。電話にて返答の旨、返事す。井上徳三氏、来。横物ハ一に御願ひしたしと云ふ。廿五日京都へ立つと云ふ。有坂房之助、箱書。色紙直し、墨絵立樹、偽筆。信州から東京へ来て、店を出してゐる男、過日、春草の半切を、下谷のお八重に世話して買はせし時の売主、紙本、寒山拾得、箱書に持参。先生は二枚目と云ふ(はがしの)。

十九日 晴

石倉翠葉より、色紙送り来るも、二つ折になりて配達されしため、使用出来ず。小港、市川へ藤を貰ひに行く。来客なし。水戸、渡辺氏、十枚全部、出来上る。

廿日 晴

丸方堂、中罵、扇面地、三枚、持参。島田悦山、南紀美術会の件にて来。桐生、斎藤元四郎、尺八、〔○〕嵐山(人物在)春、一枚、発送。

水戸、渡辺氏、依頼。〔○〕十枚渡す。

湖上の月 三尺巾小切 尺八横物

峯の月 三尺巾小切 古木孤猿

雨後の月 尺八 白 二羽飛ふ

朧ろ月 尺八 竹

三光 尺五双幅

竹影 尺八 東坡らしき人物在。

日の出 尺八、雪松

日の出 海の松 海辺の老松

磯の朝 尺八 一羽飛ふ

廿一日 晴

来客、別になし。琅玕洞、〔○〕小品、氷魚、届く。

廿二日 曇天

伊東源四郎、代人、尺五巾、〔○〕孔子ノ図、渡す。井上徳三、来。石倉翠葉より色紙、着。杉山絵具店より、飯巻見本、三本、二尺一、尺五二、来る。上等、四十三銭と云ふ。松岡文橋、来。此三十日に亦来る由。

廿三日 晴

井上徳三、小品物、〔○〕星祭図、渡す。斎藤元四郎より、電報にて正に受取つた由、申来る。尾関義一と云ふ弁護士、中川八郎の件にて来訪。山田様と面談。小管充、良寛、六曲の件にて来訪。尺八、三枚にて交換したき由。東黒門町、

針久旅館、滞在。雅邦遺墨展幹事、横田準之助、来。二十五日に持参する旨、伝へ歸す。

廿四日 雨模様

正木直彦氏、紹介にて、大蔵雄天、来。尺五へ観音図を一千円にて依頼し度き由。日限十月頃、四五日中、持参すると云ふ。中畑米次郎、来。寄附画の件。黒須へ電話を通ず。雅邦展観の件。三の谷、村田氏へ、画帖と〔○〕小奉書（犬ノ図）持参なす。

廿五日 雨

午後、先生、自笑軒、松本追善へ出席。奥様は、午前、御出掛け。帝国施業院、伊藤頼子、来。五拾円の金包を持参して、何なりとも小品を揮毫して呉れと云ふ。不在故、断る。東京□□音吉、箱書に來。預る。昨年末、赤尾藤吉郎に描きし住吉明神？なり。千四百円にて求めし由。千葉県印旛郡、押尾保太郎と云ふ男、先生の筆だと云ふて、大幅、山水（川合玉堂あたりの）を鑑定に持参、偽筆である。夕刻、村田氏、昨日の礼に來る。奥様、午後九時過、御歸り。

廿六日 曇天

午前八時過ぎ、御歸宅。三溪園、村田様、来訪。奉書、犬図の謝御礼、五拾円、持参。高築より尺八、二匹、着。北上氏夫人、令息、来。

廿七日 晴

奥様等東京行き。松山清水、新潟小川へ箱書発送。京橋、川嶋鉄之助、二尺巾の件にて電話を通す。江戸協会宛、出品衣裳廿八点入行李、本牧、金沢運送店を託し出す。松島勝之助、来。鑑定「雪」、得應の為に描かれし双幅、旅車（牛の）雪後の路を走る図。但し、箱書共、偽筆。川嶋鉄之助、二五巾、〔○〕雨の嵐山渡す。藤棚出来上る。

廿八日 晴 日曜日

奥様等、正午頃御歸りになる。入り違ひに自分が出掛ける。雅邦遺墨展覧会出品の幅十点、龍岡町、橋本へ届く。美術院へ同人展覧会出品〔○〕「魚憶」、鯉の図、二五巾、二尺三寸巾、届く。午後九時、歸宅。

廿九日 雨

江戸協会へ電話を通ず。東京会、田中来訪。江戸協会より、福田某、来訪。出品衣裳、受取二来る。横浜駅前、㊦運送店より、行李を受取り、手荷物として出す。東京、堀江崑一氏、来。粉河寺縁起、一卷、頼む。但し、並製一卷、三十五円也。

卅日 雨

京都、廣瀬都巽氏、依頼、桐菓子盆虹、出来。大阪、奥田弥生氏、依頼画帖、出来。共に発送。会津、岩田圭一郎、依頼、印譜帖発送。中畑米次郎、半切、〔○〕風竹、渡す。鉄砲場、遠藤医師、岩立某他、某下の先生同伴、高築誠之助、尺八、〔○〕静暮——釣舟在り、讀書して浮木を待つ、山に暮色——

を渡す。

〔傍欄補記〕

高築誠之助、尺八二枚、筆料未納。

齋藤隆三氏宛、水戸、渡辺氏依頼、日月十題の題字、送くる。松岡より速達にて明後、卅一日に頂戴に出るとしてあり。

卅一日 矢張 煙雨 風さへあり

松岡文橋、色紙、「○」「竹、富士」、渡す。高築誠之助、尺八「○」、「秋の装」(錦木に百舌ノ図)、渡す。井上の親爺、尺八、目白に紅梅、渡す。

〔欄外〕

四月一日 概ね晴

午前九時、雅邦遺墨展覧会へ御出掛け。書畫骨董雜誌社主、井汲倉蔵、大蔵雄夫、来訪。尺五、白衣観音、揮毫依頼の件、千円で御願いしたしと云ふ。信州、小山重右門氏より味噌一樽、桃鐘詰一函、着。午後四時前。御帰り。江戸協会より、出品物撮影の件にて来る。

四月二日 雨

午前三時、美術院よりの速達封書、来。午後一時、先生、御出掛け。三時、会合の由。浅草、福田仁助の代人として、六十四、五の男、箱書に来るも、不在の為め明日を約し預る。図は河骨に鶴鶴の飛へる図、これは江尻、山梨謙藏の為めに描きし図、日記を調べて見ると、昨年十一月二十七日に鉄道便にて箱書に来て、十二月の三日に返送したものである。箱書が二重になる訳けである。

堀江氏より粉川寺縁記一卷、着。小山重右門へ礼収書、書畫骨董雜誌の井汲

倉蔵へは、依頼画、謝絶の旨、伝ふ。昨夜、先生が石原様へ寄って、先生が御気に召した様でしたからとて、白高麗の壺と他に何にか一つ届けて来る。未だ拝見はせず。終日、煙雨止まづ。来客、殆んどなし。元、田代氏蔵なる良寛、六曲一双、着。午後十二時、御帰り。蛙の声、聞ゆ。

三日卒然として雨

午前九時過ぎより、幅(古画、宋画、老子出関の大幅、米庵小像等)六七点東京へ持参。美術院へ届く。不在中、小原梅太郎、画帖とりに来る由。来客、関谷弥兵衛。二時まで待てど、御帰りにならず。

四日 雨 荒る前の如く生温かし

六時、眠か悟めし時、電報が来る。昨夜、先生が帰られぬ旨、うちしものなるも、今朝になりて来ては間に合ぬ。花を買ひに行く。小田原の桜だと云ふを買ふ。神戸神間、米澤某、来。五月中旬、展観につき、本月一っぱいに依頼したき由。書留で一千元来たりしもの。横田仁助の使、箱書をせず返す。今一つの箱書をなせる。蓋を持って来いと云つてやる。午後九時半頃の電報に依れば、二三日旅行するからと知らせて来る。八王子□□より山ツ、ヅ苗木、拾個、着。運賃、七円、支払ふ。

五日 雨

根岸鉄太郎、来。先生より消息なし。

六日 曇り
消息なし。

七日 晴

美術院より幅（老子出関等）、届く。やうやく天気になる。今日も消息なし。

八日 概マヤね晴。

江戸協会より、出品衣裳二十八点、持参。大津町、鳥居塚敏之輔氏、来。此の人、山形己之次郎氏を知って居る由。山形氏、以前に通称方屋に六年奉公いたせし事ある由。黒須様、箱書置きて帰らる。京橋、書画商、瀧澤の使、松に日出の図、鑑定に来る。偽筆なり。証を出す。三越、清水氏、大阪支店、原楨氏、同伴来訪。午後八時過ぎ、先生、塩原より帰宅。

九日 晴

桜大分開く。南米岳家内、来。一時頃まで話しこむ。岡村如軒、来。先生の筆だと云ふ、無落款の聖徳太子図、鑑定に持参。偽筆なり。

傍線欄外
(註) 南米岳ノ山路ハ後日光筆ト判明ス。

米岳家内の置き半切は、二枚共、真筆、一は山路の一つは鶴つるなり。雅邦会幹事、横田準之助出品の幅、返しに来る。其の時の話。先日（此の一日）博文館より来て、記念の扇面を揮毫を依頼し度しと頼まれし由。それから、昨年一月、永邦氏を通して依頼せし尺八の件を話す。中外美術？の横山時彦氏、荒井寛方氏紹介にて来り、五百円にて依頼して帰る。寸法随意、期間、六月三日。但し、開会期日なり。高島屋美術部、高橋初郎氏、来。五月初旬の展観の件

なり、絵絹、預る。猿楽町、松本より、足駄一足小包にて来るも、家のではない。何処のと間違ひと思ふ。

十日 晴

午前、寺内より箱書に来る。水戸、渡辺氏、十幅の分、預り置く。午後、散歩に出てし留守中、安川大成堂主人来り、依頼画の件にて、何にか申して帰りし由。

十一日 晴

寺内より箱書を取りに来る。雅邦素画集、五拾円にて買はせらる。台所の先きと応接間の窓の日除を取りつける、三十七円也。

十二日 晴

粉河寺縁起一卷、代卅六円、振替にて払ふ。倉島恒太郎、箱書に来る。尺八、「冬の月」、寒月梅花を照し樹下に鴛鴦の眠むる。光用穆（東京毎日新聞記者）、来。

十三日 晴 風あり

花満開。黒須様、来。黒川、淺吉家内、箱書とりに来る。有朋堂より文庫百二十冊着。

北海道釧路、吉田爲造より書留にて、三拾円小切手入封書、来る。

十四日 曇後雨

来客なし。

十五日 晴後曇り

島田友春氏、来。釧路、吉田爲造より小包にて□□製らしき、来る。
南米岳、鑑定二幅、石原氏に渡す。山路（老子）。

十六日 曇天

北海道釧路、吉田爲造、小切手三拾円（横浜第三銀行）並びに、製鮭、書留にて返送、小玉素行氏、小管充、来。京橋、坪井義意知氏、来。尺八、〔○〕桃源、渡す。小管氏、持参せし沢潟の図は、先日、浅草、福田仁助の箱書に持参せし図と、同一のものにして、静岡の山梨氏の図とは、全然違ふ由。富山県、木村元次郎より、鑑定の小包、送り来る。偽筆なり。

十七日 晴

「丹青」の使、「維摩尺五」を鑑定に持参。此の図は、四五日前、雑司ヶ谷五〇九、片岡長輔と云ふ会社員らしき男が、持参せしものにして、ひどい偽筆なり。使の者の話によると、四五日前に、其の男が来て、真筆だと意張つて売りつけて行つてもので、直接描いて貰つた様な事まで云つたとう^{ママ}。或る人に見せたところが、偽筆だと云つたので、すぐ電報で返信する旨、交渉中なのだ云ふ。づるい奴だと、しきりに憤慨してゐる。島田友春氏より、頼山陽の書の写真が来る。石原様より来「た」る箱書は、どちらも□紙本、一つは「案山子」、一つは丹□和尙^{（鑑）}。
〔補外〕
補十六日分（京都柘屋より筒、着。山田艸芸堂主人、番頭と来訪。江戸協会出品衣裳、撮映の件）。小管充氏、箱蓋、富山県、木村元次郎、鑑定、発送。

十八日 日曜日 曇り後晴

美術院へ電報をうつ。今日の相談会に欠席の旨。（天台宗）滋賀県、比叡山延暦寺内、御遠恩事務所より、金三百円、替為替にて来る。天台登山ノ図、揮毫料としてなり。

十九日 晴

東京、伊藤正之助、来。尺八、雪の図、真偽の件。松島藤之助、持参せし時、偽筆。二月中、本人の持参せし時は真筆。元、得應軒の為に描かれし双幅の一方の由。伊勢崎町、斯波紙店より席画らしき富士、鑑定に来る。夜、南米岳の絵、二尺巾、〔○〕醉李白、石原様まで届く。林代蔵より、ツムギとか小包にて来る。

廿日 晴

伊藤正之助、昨日の雪の幅、渡す。東京会、田中良助、来。千葉、島田友春氏より卵、贈らる。

廿一日 晴

安川大成堂使、催足^{ママ}に来る。福島県信夫郡鎌田村、八幡敬老会事務所として、巻き筒一個と封書（初刷物の）が来る。八幡敬老会とか云ふ名で、佐久間某と云ふ百歳になる老の寿の祝として、何にか揮毫して呉れる様と書いてある。夕刻、武山氏紹介にて、京都、中村大観、来。日本大観と云ふものを出版するに就いて、小品を依頼したしと云ふ。百五十円にて、尺八、小品物切を依頼して帰る。図は巖島神社にて、期日は院展出品にとりかゝる以前にとの事。

市内「書画仲買」、高橋某、尺八、朝陽、箱書す。

廿二日 晴

東京、松田の使、春草、色紙「竹」、鑑定に持参、偽筆なり。夕刻、雷鳴あり。

廿三日 晴

長谷栄吉、来。林和靖か帰去来との事。外二来客なし。

廿四日 晴

東京会、田中良助、来。二尺巾、「○」懐古、渡す。小石川、奥田氏、来。

廿五日 曇

浦山幾次郎とか云へる老人、来る。飯田町、^伊佐藤正之助が、過日、持参せし雪の図の鑑定、真偽の件にて来りしなり。浦山は伊藤より買うけ、御徒町、大瀧林三郎と云へる表具師により、表装横となり、中央美術株式会社へ出し、足利の温田某に売り渡せし由。其の後、松島勝之助の手に入り、再び鑑定に來れしものなり。値千五百円の由。美術院へ電話にて、此度の旅行断る。片多徳郎氏、来。二尺巾を依頼して帰る。但し、絹も金子も預らず。図は随意にて先生 の作との事。

（傍欄補記）
本182、1018。

博文館美術写真記者、一氏義良氏、来。五月号画報に、古代衣裳を載せ度き故、撮映を許して貰ひ度しとの事。五月廿日過ぎを約し帰す。昨日も芸艸堂^カより、電話にて撮映の事申し来る。これも来月下旬と約す。

廿六日 雨

安川大成堂へ電話を通ず。安川の使、二度、来る。乾氏より電報。中畑米次郎より林檎、着。

廿七日 曇

浜松の清水陸秋と云へる者より、封書にて、山林を売り度き故、原氏へ御世話を乞ふ。謝礼を一割五分すると云ふ。失礼な手紙なり。鹿兎寫、中村与一郎、封書にて、二拾円、為替券封入なし、教育上の為めに、一葉揮毫を願ひ度しと申し来る。早速、書留にて返送す。

乾氏、友人同伴にて来訪。色紙四枚渡す。安川大成堂、来る。「○」尺八、「雨後洞庭」、小品「○」「富士」、渡。五百円持参なす。領収書渡す。前金と合して、一千五百円也。領収書には図題、記せず。溝口禎^マ二郎氏、来。町田清治より雅邦先生三幅対、着。中畑米次郎、礼収。中村与一郎、為替、返送。清水陸秋、謝絶状、出す。

廿八日 晴

島田友春氏、来。黒須氏、来。

廿九日 晴

東京、柿沼氏、来。小品「富士に日出」、渡す。信州小諸、島田常蔵、尺八、寿老、送くる。

卅日 晴

中央美術□会社の展観を日延べする由、申来る。

五月〔欄外〕

五月一日 雨

観山会、黒須宅。京橋、高寫屋、高橋氏、来。尺八、懷古、観山会へ御持になる。

二日 曇り

町田清治、雅邦筆三幅対、鉄道便にて発送。江島、わんや、来。

三日 雨

町田清治、来。催足マツなり。

四日 雨

溝口禎次郎氏より宗文画苑二冊、贈らる。

五日 雨

よく降る雨なり。来客もなし。

六日 雨

観山会、木村博士分、尺八三幅対（但し、左右、尺八、二つ切れ）、白菊翁、黒須様宅まで届く。

七日 曇り 雨

塩川表具師より蕪村、人物山水一幅、崑山、紙本墨絵、サクロの幅、持参。崑山の方は真筆の由。蕪村偽筆也。売物の由。ザクロ、七百円と云ふ。三越、清水氏、来。九日、展観の由。

八日 雨

来客なし。

九日 曇り 雨

長谷栄吉、来。尺八、帰去来、半切二枚（ポケ。舟に乗れる僧）、渡す。後、色紙四枚と尺八納涼図一枚と雛屏風なり。正木直彦紹介にて、北浦大介、来。十四日より廿四日まで、聖徳太子記念展観日に就き、二尺以下のもの一葉、出品を願ひたしとの事。飯卷五十本、代七百五十錢「振」替カ為にて出す。岩立義太郎代人として、植村某、来。此度の株の暴落で、少しく勝手が不如意カになったから、先年依頼せし際、御預けした金子を返して呉れとの事。明日午後と約す。

十日 雨

午後、岩立の代人として植村某、来。預りの一千円、渡す。

十一日 晴

寫田友春氏、来。三の谷、村田、来。催足マツ。奥田氏、来る。紹介状と金包み、預る。二、三日中、御返事伺ひに出るとの事。黒須様より電話。十四日、午

後五時、芝、紅葉館にて観山会十週記念を祝すべく、冥を開く由。

大阪

十二日 曇後雨

大阪、奥田弥生より、味噌漬樽、着。午後、松崎佐右衛門、南次五郎、来。

十三日 雨後曇り

観山会の為、先生、日本橋倶楽部行き。高田令夫人の帯「竹」、御持参になる。三溪園、村田様宅、画帖届く。図、鶉飼。夜、東京、長井氏より電話あり。

十四日 晴

正午より東京へ御出掛けになる。午後五時、紅葉館の会。石倉翠葉代人、来る。画帖渡す。先生等の御帰り、一時過ぎ。

十五日、曇天

日本橋倶楽部、観山会へ行く。琅玕洞にて、長野草風氏に会ふ。昨日長崎より帰りし由。トンボ玉の半切の話し、出る。今日と芸艸堂より、小包にて、「こんぶ」来る。

十六日 曇天

上根岸町、高橋逸馬、(電)下谷一五一番、葉書にて、長崎、澤山氏の分、催促。八王子市寺町一、堀江伊楚よりわらび、至来。礼状出す。

長崎市油屋町十二番地、矢野方

高比良雄之充

ウニの礼状出す。

兵庫県灘御影町、本嘉納商店へ、四斗入一樽、注文す。蒲田、尾世川古次郎、来。広業の幅と双幅の催促なり。

十七日 晴

来客もなし。

十八日 概ね晴

宮川大壽へ書留にて封書、出す。延引の謝罪の事なり。静岡由比町、豊嶋俊文氏より夏蜜柑至来。夕刻、小柳町、大久保権蔵氏、初めて来訪。此廿五日、結婚披露の由。此の四五日来、筆を執らざりしも、今日初めて、尺八、舟子の図、御描きになる。

十九日 晴

和歌山県内務部長、竹井と云ふ人、電話にて面会を申込み。午後、代人、和歌山ネル二反、進呈として持参なし、面会を申込み。島田友春氏、来。絵画清談の山浦、来。又、メ二枚の催促。

廿日 晴

六人

来客なし

廿一日 晴 五人

〔傍欄補志〕
大正十年四月二十一日出来。

午後、竹井貞太郎氏、来。三尺巾、依頼して帰る。内金として五百円置く。
菊正宗の出荷案内、来る。代金七拾八円五拾銭也。

廿二日 晴

真間角の御寺から、竹二本呉れる。午後より、先生、房州勝浦在へ御出掛け。
千葉にて、博物館溝口氏と同伴の由。竹井貞太郎氏使、来る。廿三日、帰紀
いたす故、一日益を共にしたいとの口上。

〔欄外〕
五人。

廿三日 晴

井上徳三、来。枠張一個と□□台預る。枠の図は一月にて横との事。
午後十時、アspanカヘルとの電報あり。キヨミ局としてあり。

廿四日 曇後雨

川村東陽、箱書（半切）を置いて帰る。浜中移山氏、半切の催促。マツ志成学校は、
毎週月曜日、午前中の由。箱根、妹尾春太郎氏、来。林嘉納商店、金七拾八
円五拾銭、振替にて払ひ込む。夜十二時過ぎるまで、先生を待つ。遂に御帰
りなし。

廿五日 晴

午後二時、寺内の使い、手紙持参。先生の着物、美術院まで持参せよとの事。

三時、奥様、御出掛けになる。井上、来。菊正宗大樽着。午後十二時頃、御
帰り。大分□酩酊の様子。

廿六日 晴

午前九時頃、法隆寺管主佐伯氏、来訪。先生、下の先生と御三人にて三溪園
へ御出掛けになる。正午頃、下の下村に帰らる。□□進にて□□
差上ぐ。高寫や高橋初郎氏、来りし由。島田友春氏、来。下の家へ案内す。
下の家にて、佐伯氏等に会ふ。佐伯氏の来意は、来年四月に挙ふ太子の記念
祭に使用する面を二面を、依頼するためにこられた由。午後八時頃、島田氏
と御帰りになる。

廿七日 晴

石川安助使、雅邦先生、秋景山水箱書に持参。秀邦等の箱書あるも、偽筆の由。
返しやる。寺内の甥と云ふ定次郎、来。田舎より持参せしと云ふなめもの持
ち来る。来意をつけず帰る。荒井寛方氏友人横山氏、催促マツに来る。来月三日、
開会の由。乾南陽氏、貫名松翁の幅、持参。二、三日、預ると云ふて止め置く。

廿八日 晴後雨

菱田春男氏、来。崑山下図、返しに来るしもの。藤田青花氏、厨子の製図、
持参。先生、横浜美術展へ行く。会場にて、海老名文雄氏に挨拶される。島
田氏より葉書にて、明日雨天なれば、老人の事故、中止すとの由。夜に入り、
雨落つ。英時様、小柳町、大久保へ見舞に出る。

〔欄外〕
四人

廿九日 曇天

午前十時半頃、千葉、島田友春氏親子、尾川氏、来訪。先日、先生か千葉にて買求めし壺等、持ち来る。食昼食後、三溪園へ案内す。尺八〔〇〕布袋一枚、渡す。但、石倉翠葉二渡セシモノト同一。大塚源太郎、他一名、同伴来訪（尺八十枚の件）。大塚の分、尺八〔〇〕船子、渡す。井上徳三、来。先日預りし経函、返す。藤田青花氏、太子厨子の件にて来訪。中根が二拾円拝借いたし度と申出る。二拾貸し与ふ。灘、御影、林嘉納商会より振替の受取の葉書来る。夜、奥さん、女中等、外出す。

〔欄外〕
五人

卅日 晴

来客もなし。午後、神奈川、前田青邨氏より電話にて、面会を乞ふも病氣すとして謝る。

〔欄外〕
五人

卅一日 晴

来客なし。

〔欄外〕
六月

六月一日

木村博士へ電話を掛く。現代之美術社横山臥憲氏、封書、出す。断り状、三日の展観の事に就いて。

〔欄外〕
五人

二日 晴

酔十日、殆んど筆執らず、今日に及ぶ。昨日ハ手紙にて、現代之美術社を断る。浅草、竹内常吉氏、来。児玉素行氏、来。

三日 曇後雨

雅邦先生未亡人、御息御同伴にて御出になる。鎌倉へ参らる途中の由。午後、自動車にて、横浜駅まで先生と送る。

四日 雨 午後一時止む

奥様、東京御出掛け、午後五時前、章君と帰宅。午前、中央美現代美術社横山氏代理、見舞、持参。法隆寺佐伯氏より、面「コンカキ」の写真と封書一通、来る。下の家へ届く。井上徳三より、記念帖一部、送らる。来信、松寫勝之助（京都より尺五の催促）
中寫元芳（扇面の件）

五日 雨

梅雨には未だ早し。島田友春氏、来。玄関にて帰らる。松澤□觀氏、来。雨降りなれど、土方、男三人女一人、朝のうち見ゆ。午前中ならん。青森、宮越正治氏より氷餅？、贈らる。

〔欄外〕
六日 晴

京都、中村大観氏より、六波羅豆、送らる。

六日 日曜日 晴 別してなし

七日 晴

根岸鉄太郎使、来る。箱書、預る。尺八「春」と、小品「紅葉に紅たけ」、ホト、ギス社へ寄附せしもの。博物館溝口氏へ、電話（急報）にて、明日の鎌倉行きを相談す。明午前十時頃に横浜駅にて出合ふ様約す。

九日 晴

先生を横浜駅まで送る。駅にて溝口氏に合ふ。三十分の時間の間、川村にて休む。午前十時三十分のにて発。鎌倉ハ築二男舞。午後八時頃、御帰宅。

十日 晴

越後西蒲原郡巻町、高畠徳三郎より、良寛和尚筆の書の小品が一幅、来たる。案内状、未だ来らず。理由不明。越後中魚沼郡上郷、中島英二宛、小包出す。尺五「廓の夜」（影画）、初音町時代の作、鑑定らし。故フエノロサ氏記念会発起人の賛成承諾の件にて封書、来る。承諾の旨、返事、出す。

十一日 曇

今日より入梅なり。

高島屋美術部殿塚、催足マツに来る。十五の頃、大阪に旅して同展観の由。浜町、長谷栄吉使、箱書、置いて歸る。「尺八」夏の富士（但箱書ハ書直スベキモノ）。

十二日 曇

新潟西蒲原郡巻町

高島徳三郎

宛、良寛の書、小包（書留にて）発送。

十三日 曇天なれど雨なし。

長谷栄吉使、箱書、渡す。「夏の富士」。

補十二日分

松田亀七使、来。三、四年前の預り品、扇面と色紙の受取りに来る。大分古き話し。亀七自身持参せしとの事。

十四日 曇天

高橋幾造、来訪。伊勢桑名の富豪が、別荘へ先生を召して、絵を御願ひいたし度いが、如何と云って居る。何れ全快の上とくと考へて御回答する旨、返事挨拶す。

曙町一六番地

高橋幾造

十五日 曇

中畠丸万堂の手紙、持参なせし廿四、五の女に、扇面二枚、張果老（金地）、鶉飼（緞地）、渡す。

下谷区上埜町一丁目十八番地

松澤、元（八観）成淵。

箱書、催足もよほに来る。今月末に入用の由。図ハ墨絵小品にして、「旅の夕」ト口に乗る人二、三人在。

十六日 曇後雨

十七日 晴

大観氏より電話、近日、来浜との事（但し、十六日朝の分

〔欄外下〕山口氏、箱書預りハ、小品色紙の幅□、〔三保の富士〕

十八日 晴

黒須様、来訪。高田の小管充氏、来。東京、山口（書画屋）、来。雅邦紙へ水墨にて山路を描きし図。澤達の持参せし時、箱書をなし、長谷より鑑定に來りし時、統筆の疑あり。偽筆と云ひ渡せしを、今日、此の山口某が再鑑定に持参す。面□□故、真筆と返事す。
寺内より明治神宮屏風、荷車にて来る。

十九日 雨

柿沼氏、坪井、木下藤次郎（浜町の人）、来訪、箱書に来る。柿沼氏の小品「富士」、坪井氏の「桃源」は、共に蓋のみ預る。木下氏、尺八「牡丹」、初音町時代の作。小品、博雅三位ハ、幅とも預る。

竹内常吉、来。預り金、五百円渡す。

大阪市東区南久寶町

（南久寶寺町九）

吉崎常七

より小包、来る。

廿日 日曜日 曇天

比叡山の僧、天台登山揮毫の事にて来訪。大塚源太郎、来。

廿一日 曇天

事故、別してなし。

廿二日 曇天

井上徳三、来。松寫勝之助、大塚の使にて来。二月二十二日、尺八、十枚の約にて、内金として、一万円預けしを、返済願ひ度いと云ふ。主人ハ旅行中不在故、旅行先きへ紹介して、近日中、回答する旨、申し渡す。

小樽市花園町東二丁目十一番地

吉田栄氏

宛、封書にて大塚に渡しても宜しきや否や、返答を求む。大塚の金主なり。

廿三日 曇天

関谷小次郎の親、来。先日御礼に來たと云ふ。

廿四日 曇天

福松葉お八重、引退の赤飯、持参（使を以て）。大塚源太郎氏より電話。例の揮毫解約の件なり。三越、清水氏、来。

廿五日 晴

倉林外七氏の弟と云へる人、代理にて来る。これも揮毫解約の事なり。のしを付けて差出せし鍋島の皿五枚も返せと云ふ。実は金子のみ返却なし。此の皿にて描いてほしいと云ふ。失敬な奴である。商人根〔性力〕である。此の皿を破損するか、人に贈物にでもせし後なれば、如何。人間の軽薄な浅ましい姿が見える。日暮、杉山環湖氏、来。岩立義太郎の揮毫解約は、少しも存ぜざりしとして、謝罪に来る。但し、其の節、依頼せし分は何分願ひたしとの事。神戸新聞記者米津獨坐氏、来。午前、大塚源太郎より電話。午後、大塚、来訪。一万円の件也。國華社影山氏、来訪。寸法随意。

新潟県北蒲原郡濁川村

近藤賢之助

六月二十六日

右の之者より小包一個、書留封書一通、来。椀の蓋にて落款を入れて呉れとの事。墨料として、二拾円為替券一枚封入なしあり。早速に返送す。山田福太郎氏夫人、来。大塚より封書来る。午後、石原氏宅にて、倉橋氏へ、二千五百円渡す。

廿七日 曇後雨

留守中、石原氏同伴、山梨氏、来訪。扇子の催足マツの由。大塚を書留にて吉田の委任状来る。

廿八日 降らざれと風強く吹き荒れる。

横山大観氏、名取氏、来訪。名取氏、午前中、帰る。大観氏同伴にて、先生、千登世へ御出掛になる。大塚より電話。吉田栄の一件。奥田氏、来（高田様紹介の人）。

廿九日 曇天

黒須様、来訪。山形市新築町滞在の石川丹麗女史より、桜桃、来る。信州須坂町高橋葛之助より、春草、蘆芦の幅、来る。鑑定ならん。乾南陽氏、来。探幽の鷺と蓮図幅。守景、雷。安信様、美信踊の図（一蝶風のもの）、持参。以前、預りし守景の幅、持ち帰る。

卅日 晴

大塚源太郎、来。一万円現金にて渡す。郡山、川口誠三郎より、桜桃、沢山来る。

（一二二丁の裏から一二七丁の表まで記事なし）

目録

打掛

- 一、地黄綾子 加賀友禪模様 貝桶 紅裏
- 一、地白綾子 繡模様又ハ鹿子 貝桶 紅裏
- 一、地紅綾子 繡模様 祇園守つなぎ 紅々
- 一、地紅綾子 繡模様 橘二折鶴 紅裏

振袖

- 一、地白綾子 繡模様梅鹿の子麻の葉
- 一、地淡藍綾子 總鹿の子 模様なし

詰袖

- 一、地淡藍綾子 繡又ハ加賀友禪 扇面散し
 - 一、地白綾子 繡又ハ摺箔模様梅二菊 紫裏
 - 一、地白縹子 繡鹿の子模様 桔梗唐草
 - 一、地黒綾子 總繡模様 菊松竹梅
 - 一、地白縹子 伊達模様 繡鳳凰鹿の子紅退色
 - 一、地淡藍綾 孔雀尾綴付ケ繡模様組袋
 - 一、地淡藍縹子 繡模様源氏貝散し
 - 一、地々々々 鳥兜
 - 一、地 藍縹縹子 単衣
 - 一、地 壁著羅紫 襟模様雪輪にこぼれ梅
 - 一、浮織金糸 模様 七宝繫
 - 一、寛永年度在家婚礼衣裳
- 地真岡木綿 模様松竹梅
- 夏物
- 一、地白麻 模様 梅二牡丹 裏つき
 - 一、越後上布 葦二蛭、白裏つき
 - 一、地紫絹縮 葦二雪、白裏つき
- 帯 三点
- 一、地 萌黄 縹子 繡模様 孔雀二牡丹

一、地白 全々々々 宝尽し

一、地萌黄縹子 桐二鳳凰

一、鹿革 奴羽織

女物火事裝飾一組

一、白羅紗、葵紋着付

金糸浪模様なり

一、十一代將軍家齊公五才衫服袴

以上は江戸協会へ出品せしものなり。

〔一八九丁の裏、記事なし〕

〔裏表紙、記事なし〕

別表1

日記種別	西暦	和暦	月	日	記事
やまの上	一九二〇	大正九年	三	一	大森、東京美術日報社より、書留の封書、来る。百六十円を振替で送るから、尺五巻枚、描いてほしい云つてゐる。
				二	観山会、井上辰九郎氏、尺八、〇「勇駒」、中山隣之助氏の招。
				四	島田友春氏、来。尺八、〇「東坡先生」・竹林高士の如き図、渡す。
				五	高嶋屋美術部、殿塚、小品物、催足(ママ)に来る。大阪、堀氏夫人、来訪。午後、東京、坪井氏、雛の幅催足(ママ)に来る。菓子包と粗品として、五百円包み来る。此前の三百円と合して八百円なり。日本橋、小熊慶造より書留の封書にて、「昨年(大正六年)の箱書の催足(ママ)」。
				十	寺内へ電話を通す。尺五双幅の件。
				十一	寺内新太郎、来。尺〇「五双幅、林和靖、渡す。
				十三	太田鐵次郎氏、小諸、小山重右衛門を同伴。尺五、尺八等依頼して帰る。
				十五	黒須様の新宅祝として、〇「尺八、寿老、一枚、持参。今一枚、〇」月夜の竹(これは日月十題の分として描きしも)、持参。橋本未亡人の由。
				十六	石倉翠葉、〇「尺八、布袋、渡す。
				二十	水戸、渡辺氏、依頼。〇「十枚渡す。湖上の月 三尺中小切 尺八横物 峯の月 三尺中小切 古木孤猿 雨後の月 尺八 白 二羽飛ぶ 臘る月 尺八 竹 三光 尺五双幅 竹影 尺八 東坡らしき人物在。日の出 尺八、雪松 磯の朝 尺八、海辺の老松 一羽飛ぶ
				二十一	琅玕洞、〇「小品、水魚、届く。
				二十二	伊東源四郎、代人、尺五巾、〇「孔子ノ図、渡す。
				二十三	井上徳三、小品物、〇「星祭図、渡す。
				二十四	正木直彦氏、紹介にて、大藏雄天、来。尺五へ観音図を一十円にて依頼し度き由。
				二十七	三の谷、村田氏へ、画帖と〇「小奉書(犬ノ図)持参す。川嶋鉄之助、二五巾、〇「雨の嵐山渡す。

日記種別	西暦	和暦	月	日	記事
やまの上	一九二〇	大正九年	三	二十八	美術院へ同人展覧会出品「魚憶」、〇「鯉の図、二尺三寸巾、届く。
				三十	中畑次郎、半切、〇「風竹、渡す。鉄砲場、遠藤医師、岩立某他、某下の先生同伴、高築誠之助、尺八〇「静暮」釣舟在り、読書して浮木を待つ、山に暮色——を渡す。
				三十一	松岡文橘、色紙、〇「竹、富士」、渡す。高築誠之助、尺八〇「秋の装」錦木に百舌ノ図、渡す。井上の親爺、尺八、目白に紅梅、渡す。
				一	書骨董雑誌社主、井汲倉蔵、大藏雄夫、来訪。尺五、白衣観音、揮毫依頼の件、千円で御願いしたと云ふ、高嶋屋美術部、高橋初郎氏、来。五月初旬の展覧の件なり、絵絹、預る。
				十	安川大成堂主人来り、依頼画の件にて、何にか申して帰りし由。
				十九	二尺巾、〇「醉李白、石原様まで届く。
				二十一	夕刻、武山氏紹介にて、京都、中村大観、来。日本大観と云ふものを出版するに就いて、小品を依頼したと云ふ。百五十円にて尺八、小品物を依頼して帰る。図は厳島神社にて、期日は院展出品にとりかゝる以前にとの事。
				二十三	長谷栄吉、来。林和靖か婦去来との事。
				二十四	東京会、田中良助、来。二尺巾、〇「懐古、渡す。
				二十五	片多徳郎氏、来。二尺巾を依頼して帰る。但し、絹も金子も預らず。図は随意にて先生「」の作との事。
				二十七	安川大成堂、来る。〇「尺八、雨後洞庭」、小品〇「富士」、渡す。
				二十九	東京、柿沼氏、来。小品「富士に目出」、渡す。
				六	観山会、木村博士分、尺八三幅対(但し、左右、尺八、二つ切れ)、白菊翁、黒須様まで届く。
				九	長谷栄吉、来。尺八、婦去来、半切二枚(ポケ、舟に乗れる僧)、渡す。後、色紙四枚と尺八納涼図一枚と雛屏風なり。
				十三	三溪園、村田様宅、画帖届く。図、鶴飼。
				十八	此の四五日米、筆を執らざりしも、今日初めて、尺八、舟子の図、御描きになる。
				十九	絵画清談の山浦、来。又、メ二枚の催足(ママ)。
				二十一	午後、竹井貞太郎氏、来。三尺巾、依頼して帰る。内金として五百円置く。

日記種別	西暦	和暦	月	日	記事
やまの上	一九二〇	大正九年	五	二十三日	井上徳三、来。枠張 個と 台預る。枠の図は一月にて横との事。
				二十四	浜中移山氏、半切の催足(ママ)。
				二十七	荒井寛方氏友人横山氏、催足(ママ)に来る。
				二十九	千葉、島田友春氏親子、尾川氏、来訪。先日、先生か千葉にて買求めし壺等、持ち来る。昼食後、三溪園へ案内す。尺八(〇)布袋一枚、渡す。
			六	十一	高島屋美術部殿塚、催足(ママ)に来る。
				十四	高橋幾造、来訪。伊勢桑名の富豪が、別荘へ先生を召じて、絵を御願ひいたし度いが、如何と云つて居る。何れ全快の上とくと考へて御回答する旨、挨拶す。
				十五	中寫丸万堂の手紙、持参なせし廿四、五の女に、扇面二枚、張果老(金地) 鸚鵡(瀬地) (絹地カ、渡す。
				二十	比叡山の僧、天台登山揮毫の事にて来訪。
				二十二	松島勝之助、大塚の使にて来。二月二十二日、尺八、十枚の約にて、内金として、一万円預けしを、返済願ひ度いと云ふ。
				二十四	塚源太郎氏より電話。例の揮毫解約の件なり。
				二十五	倉林外七氏の弟と云へる人、代理にて来る。これも揮毫解約の事なり。
				二十七	石原氏同伴、山梨氏、来訪。扇子の催足(ママ)の由。

別表2

日記種別	西暦	和暦	月	日	記事
やまの上	一九一九	大正八年	十	五日	安川大成堂 氏の廿四が展観故写真の都合もあり何卒御問合せを願ひ度しとの事。一週間後出来いたせば通知する旨を約す。高藤元四郎 着色山水人物入を希望の由。
				九	大成堂より電話にて催足(ママ)。
				十二	安川大成堂息へ二尺巾愛蓮ノ図渡す。
				十四	石川安助代人依頼画の件にて来る。
				十五	三越 清水氏屏風の件にて来る。彼の屏風は中村朝吹画氏に寄贈の由。揮毫料は伍千円にて内金壹千円持参。此度の観山会の下図「淀君」二尺巾と尺八の(中央に船があつて山があつて虹があつて雨が降つてゐる蓑を着た二人は舟に居る)は校屋へ贈るのたすうな先頃の東坡先生の屏風の一件佐々木氏は一万円位へにて手に入れ度き由。
				二十一	明治四十三年十二月(五浦時代) 知人より依頼され絹本にて二尺巾長サ四尺五寸を依頼した由。揮毫料として金参拾円を価額表記にて絹を書留にて着出せし由。尤も奥様の手らしき受取のはかきと其節絵絹屋よりの受取を持参してゐる。追加金をするから何分御願ひ、たすと云ふ。
				二十五	奥様よりの御手紙にあらにて二枚御執筆の由。画印並びに袷、羽織等を送れとある。
				二十七	愛知県碧海郡安城駅前 杉浦市治郎 書留にて百円の為替券在中の封書絵絹の包着。明年の一月までに何でもよいから御染筆願ひたいと云ふ。一先帰りまで預る旨返事出す。
			十一	七	京橋高島屋高橋初郎氏秋の展にて二尺巾巻、尺八巻都合貳枚の絵絹持参。廿一日頃開会。川島鉄之助来訪画帖の催足(ママ)。
				八	二尺巾唐美人大阪三越沢津松溪氏宛書留にて出す。
				十	長谷栄吉は 婦去来(十尺巾尺八巾)一枚と半切一枚だけ今年中に御願ひいたしたいと云ふ。
				十一	三越美術部清水来明日午前中に出来の旨話す。
				十二	三越美術部清水氏代人へ尺八双幅「静清」渡す。
				十三	京はし石川安助代人来 十二月十三日展観に就き写真等の都合あれば本月下旬に入用の由。

日記種別	西暦	和暦	月	日	記事
やまの上	一九一九	大正八年	十一	十五	大阪三越沢津氏来。二尺巾揮毫料壱千貳百円持参。受取出す。自分達等外出した留守に石原氏が岩立義太郎、杉山環湖の二人を連れて来て、壱百円と尺五の絹本を出して無理に依頼して帰った由。
				十六	ホト、ギス社の山名氏来。十八日午前の約束。野毛の倉林氏石原氏と来。
				十七	先生と野村サムライ商会へ行く。野村氏の話。先日御依頼したのを一枚で結構ですから何分御願ひすると。二千五百円で十枚描けと云ふ註文は取消になり。
				十八	ホト、ギス社から画をとりに来るかと思つたら今日は来ない。
				十九	出雲崎 佐藤吉太郎来。画帖、及び寄附画(二尺横物切)渡す。ホト、ギス社山名氏小品、紅葉ト茸の図渡す。高嶋屋美術部使来。檀扇紙二枚渡す。
				二十	高嶋屋美術部使。二尺巾双幅高士観瀑渡す。
				二十四	東京会田中良三来。尺八「竹林高士」渡す。安川岳一郎来。目出度かけにと壱千円出して無理に置いて行く。再三断るもとうとう置いて行く。
				二十五	井上の親父「来」渡金盛物台(徳川初期のものらしい)持参、これと以前持参せし巻絵の巻にて尺五二枚を御願ひしたいとの手紙、百五十円の由、断り返却なす。原田金藏使来。催足。廿五日の約束の由。
				二十六	島田友春氏来尺八相渡す(漁船あり 虹を見る)
				二十七	石川安助より電報にて催足。
				二十八	黒須氏来訪。来月四日 観山会の人々来浜。三溪園へ来るとのこと。尺八 虹(山籠に虹あり傘さし走る人 二人) 黒須氏へ渡す。此れは先頃観山会を京都に開きし際、松茸狩の礼の由。
				三十	郡山 川口誠之助来。画帖、尺五六枚の催足。
				四	高嶋屋店員、秋の会二尺巾双幅の代、二千五百円持参。原田金藏。尺八「夕月」漁夫、停船、兎垂垂足。
				八	安川大成堂へ尺四巾高士渡せし由。
				九	二尺巾 竹林弾琴(倉林氏の分)先生自身石原氏宅へ持参。尺八の双幅をこれにてすませたしとの事、山崎清三郎小包にて出す。
				十	渡辺実。尺八蓬萊渡す。

日記種別	西暦	和暦	月	日	記事
やまの上	一九一九	大正八年	十二	十一	箱根小涌谷温泉の榎本恭三之菓子折、尺八絵絹持参。先年先生当地へ参られし節の御約束故何分御願ひいたし度いと云ふ。先生は知らないと云ふ。菓子折と絵絹預る。松岡文橋来。ギヤマンの瓶三個持参。大院君の持ちしもの、由。これと貳拾円を包んで来て色紙二枚を描いて呉れと云ふ。
				十三	手紙広島県岩手郡新市町 官原繁治と云ふ者から銀行小切手で二百円封入して、明治四十二年六月申「河渡りノ虎ノ図」を依頼してある。子孫に伝ふるものであるから雀一羽でもよりから描いて貰ひ度いとある。寸法は別に記していない。
				十四	瀬能正太来。裏箔「日出」の催足(ママ)。
				十六	東京「特殊小学校より寄附画の催足(ママ)」に来る画帖預る。
				十七	サムライ商会野村氏宅へ尺八「雲成」持参、表装にまわして貰ひ度との事故預り帰る。
				十八	松岡文橋氏来尺五「雲成」一枚渡す。先日の色紙は二枚にて小切は取消す事。色紙一枚と念を押す。
				二十一	箱根小涌谷、榎本恭三云ふ人、先頃尺八の絵絹を置いて帰つて今日出なほして来る。謝礼は出来の上に頂戴すると云つて揮毫を引受けし。黒須氏来。石川丹麗女史来。画帖二預る。年内の由。謝礼として五拾円持参。遠山氏の尺五もと云ふ。
				十八	夜尺五「清水観音」を石原様宅へ届ける。
				十八	国華社藤山氏来。寸法何にてもよし。
				二十一	福沢市太郎来。追加金一千円を出し以前の百五十拾円にて色紙何か小品二つほしいと云ふ。奥様が受取出す。先方では最初色紙一枚、短冊二枚(絹無地)尺五双幅尺八壹枚と云ふ申込なりし由。
				二十三	老松に寄生木。六曲一双。仕上る。原様の使に渡す。
				二十四	太田吉松来。年内半切二枚送る旨約す。大村マ来。佐藤益之氏の依頼にて尺八に寒山拾得を願ひ度いと云ふ五百円包を置く。
				二十六	赤尾藤吉郎来(午後)尺八二枚と話さる。一枚は年内にて後一枚は来年追加金を持参して頂戴すると云ふ。
				二十八	日本橋音菊の画帖、川口誠三郎の画帖、紀州新聞の橋本某の画帖出来。長谷に渡す翁：菊に水やる：尺八はほ、出来上つてゐる。新紀州新聞社 橋本義雄へ画帖出す。川口誠三郎画帖 発送。

日記種別	西暦	和暦	月	日	記事
やまの上	一九一九	大正八年	十二	二十九	松山の瀬川七、五百円の小切手を書留でよこして尺八を描いて呉れと云ふ。竹内常吉来。紙本の小品四枚と金地扇面一枚、七拾円の包預る。宮本紙の尺五四枚が尺八式枚になり亦壹枚になる。図は何んでもよし。長谷栄吉、尺八「白菊翁」渡す。
	一九二〇	大正九年	一	二	尾張一の宮 中央美術倶楽部の封書「書留」を茶の間で発見。壹百円の小切手在中にて来春二月初旬の展覧に入用なれば一月中に御揮毫願ひ度いと云ふ。
				三十一	深川鈴木某、鑑定に来。尺八席画らしき墨画の竹、宜しければ表装をなほし、改めて箱書に来る由。大正五年二月十六日、横浜に来り先生に面会なし。尺八絹本一葉三月末までの約束にて依頼し、其後何等の返事なし。来る上月末迄に、半切一枚、五拾円にて揮毫して貰いたいと書いてある。
				十一	下の井上とか云ふ人が、青木堅太郎の代理に来て、先頃の席絵の廣業と双幅の「」の図の箱書をして貰いたいと云つて、置いて行く。
				十六	華山の盃の台へ松をかゝる。四時頃、寺内より荷車着。諸井様の六曲、黒須様の二曲、東坡先生屏風なり。南條氏の六曲、鉄道にて着。
				十七	京都十合具服店の美術部の人だと云ふ二人連れ来り、三月の展覧に尺八か二尺巾を一枚、御願ひいたしたいと云ふ。千五百円預る。
				二十	根岸鉄太郎使に尺八「春」高士あり昔に桜らしきもの描く、春と題す、を渡す。
				二十二	郡山川口誠三郎来。「〇」尺五、叭々鳥、山水(支那)、哲祖の三枚渡す。
				二十三	福澤氏「〇」尺八、幽「」渡す。
				二十五	特殊小学校、小原氏来。「〇」尺五、三保、一枚渡す。画帖は預り置く。
				二十六	関谷弥兵衛来り、来月の五日の婚礼までに二曲一双を間に合せて載(ママ)きたいと云ふ。試作展「〇」出品画、寺内宛送る。二五巾
				二十七	塩川表具屋より、雪竹に小鳥の幅、鑑定に持参。安川大成堂に十幾枚描きし一枚と云ふ。五浦へ入る前年の由。
				二十八	澤達之使、先日の画帖へ落款を貰ひに来る。今一つの箱書は老子。たしか高橋幾造へ描いたもの。

日記種別	西暦	和暦	月	日	記事
やまの上	一九二〇	大正九年	一	二十九	前田侯爵の例の絵巻「」を先頃から初められて居るが、健築(ママ)が面「」倒なので、なかなかはおどらぬ様子。階段には、平困だと云つておられる。
				三十	飯塚某、荒井寛方氏の紹介(ママ)にて来り、尺八壹枚依頼なし、千五百円置いて行く。
				三十一	榎本八重二氏、画帖、柿岡渡す。
				一	柿沼氏と同伴せし坪井氏一人にて来訪。三月「」節句の幅をとて、百円にて手切。尺八等、三枚置いて帰る由。
				二	井上徳三、来。尺八「を」一枚依頼して行く。
				四	銀座東京美術館より、尺八、南泉斬猫、鑑定に来る。鈴木直三郎、半切、山水(観山会の記念分配)を持参。鑑定。
				五	岐早五藤竹重郎「〇」尺五、「引舟に虹の図」発送。
				六	石川鶴治氏、画帖「」谷中寺内へ持参。
				七	関谷へ電話にて二枚曲、出来の由旨通す。神田 六百八十番関谷弥兵衛
				十	飯嶋南来。半切、「〇」維摩、一枚渡す。
				十一	中西嘉助氏、尺八「〇」、清涼渡す。「側面の高士、竹林」。
				十二	乾南陽氏来。応挙、狗「ケン」、持参。三百五十円にて買ひ取る。尺八双幅、嵯峨野(定家)渡す。
				十四	高寫屋の高橋初郎氏来。小品画の催足(ママ)。松山市湊町四丁目、清水義影よりの返事。竹林高士之図、画帖小裂(横九寸、縦八寸)。
				十五	斎藤隆三氏来。老子出関ノ大幡、外一幅御貸しする。谷上隆介氏来。川寫鉄之助、稲垣利恭来。三月下旬の展覧に、是非、尺八を二枚揮毫願ひ度い。先生も奥様も留守の様取付。内金として、二千円並びに絵絹二枚(尺八)、先生、帰宅次第、返答によつては、或ひは、返却するかも知れず。た、仮受取のみ差上げて置く由事にて、二千円と絵絹預る。日本美術主筆、石原翠葉、武山氏紹介持参。千五百円にて、尺八一枚、色紙一枚の約束にて、銀行小切手、千五百円置と画帖(僕の画帖と書きしもの)を置く。
				十七	黒須様来。早稲田校友会依頼、寿星(二五巾)渡す。此の廿日の校友会に大隈侯に贈る由。
				二十一	小林源太郎氏の分と云ふ尺五双幅、出来上る。

日記種別		西暦	和暦	月	日	記事
やまの上		一九二〇	大正九年	二	二十四	小林源太郎、尺五双幅、「鯉」送る。
					二十六	江島碗屋の会の絵、尺五「岩上観音」渡す。 高島屋より小品画催足（ママ）、来月初旬の由。
					二十七	内務省造営局より、屏風下絵用紙着。十合美術部店員 尺八、維摩、一枚渡す。美術院より江原氏来り、尺八、 絹本二枚入筒持参。四月初旬、同人展覧会の由。大 塚源太郎、小樽丹内重兵衛、同伴来訪。尺八、拾枚、 一万五千円にて依頼す。内金として一万円持参。
					二十九	長谷の使、白菊図、箱書に持参。預る。

横浜美術館研究紀要 第17号

平成28年3月31日発行

編集◎横浜美術館学芸グループ

翻訳◎クリストファー・スティヴンズ(pp.17-19)

発行◎横浜美術館
(公益財団法人 横浜市芸術文化振興財団)

〒220-0012 横浜市西区みなとみらい3-4-1
tel.045-221-0300

印刷・製本◎山陽印刷株式会社

©横浜美術館 2016

Bulletin of Yokohama Museum of Art No.17

Date of Issue: March 31, 2016

Edited by Curatorial Department, Yokohama Museum of Art

Translated by Christopher STEPHENS (pp.17-19)

Published by Yokohama Museum of Art (Yokohama Arts Foundation)

3-4-1, Minatomirai, Nishi-ku, Yokohama 220-0012 Japan
Tel.045-221-0300

Printed by Sanyo Printing Corporation

© Yokohama Museum of Art 2016